阿玉台式土器前半期の一様相

― 常磐道柏地区の調査成果から ―

原　田　昌　幸

目　　次

（前編）

1．はじめに……37

2．常磐道柏地区の遺跡群……37

3．資料の呈示（補遺）……38

(1)　聖人塚遺跡出土土器……38

(2)　中山新田Ⅰ遺跡出土土器……51

（後編）

1．聖人塚遺跡と中山新田Ⅰ遺跡：出土土器の様相差……67

2．異系統土器の問題……69

(1)　勝坂系の土器……69

(2)　いわゆる「鳴神山系」の土器……70

3．出土土器の様相から見た聖人塚・中山新田Ⅰ遺跡の集落変遷……72

4．収　　束……78

（前編）

1．はじめに

縄文時代中期の土器研究は、現在極めて精緻にその型式編年網が整備され、各地域間の土器様式との接触・融合についても検討が進められている。集落論をはじめとした文化事象の諸分野に関する研究と共に、これらは縄文時代史の総合的な構成に貴重な所見を加えるものと言うことができる。しかしこの中で、中期初頭から前半にかけての土器群は、未だ出土資料の地域的な片寄りから、隣接土器様式との接触と、各地域における出土土器の様相差について不明瞭な部分も残されている。特に中部・関東地方南西部の土器研究で、五領ヶ台式以降、勝坂式成立までの段階的な変遷が明らかになり、東関東地方阿玉台式土器の型式編年と比肩できるまでになったにも拘らず、両土器様式の対応関係の把握は、未だ検討が続けられている（小林、1984）。特にこれらの課題を解決するためには、地理的に阿玉台土器様式の分布上の核地域に近く、かつ勝坂系の土器がある程度混在して出土する、下総台地北部の様相を検討することが、最も有効な方法ではあるまいか。そこで本稿では、常磐道柏地区の遺跡群のうち、特に聖人塚（しょうにんづか）遺跡、中山新田（なかやましんでん）Ⅰ遺跡出土資料を中心に、阿玉台式土器前半期の様相を考えてみたい。

2．常磐道柏地区の遺跡群

常磐自動車道は、起点の埼玉県三郷市から江戸川を越え、千葉県流山市・柏市を南西から北東へ貫いて茨城県へと伸びている。この千葉県内通過部分は大半が標高15～17mの下総台地にあたり、ここには各時代の遺跡が濃密に分布する。千葉県文化財センターでは、この建設工事に対処して昭和52～57年に、合計15遺跡の発掘調査を行い、その成果を『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書』Ⅰ～Ⅴとして刊行した（昭和57年～61年）。この中で、柏市域には、館林（たてばやし）遺跡、水砂（みずすな）遺跡、及び柏インターチェンジ部分の中山新田Ⅰ・Ⅱ遺跡、聖人塚遺跡と、縄文時代中期前半の規模の大きな遺跡が群在する（第1図）。これらの遺跡は調査区内にいずれも数軒以上の竪穴住居跡を含み、阿玉台式土器前半期の土器を主体に出土するが、より詳しく見れば阿玉台Ⅱ～Ⅲ式期を中心とした館林・水砂・中山新田Ⅱ遺跡と、より古手の阿玉台Ⅰb式を中心に、Ⅰa式の資料を含む聖人塚・中山新田Ⅰ遺跡に二分することができる。

本稿で扱う後者の二遺跡は、既に『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書』Ⅳ（田村・原田、1986）で報告されたが、諸般の事情から縄文時代中期前半の出土資料について、十分な報告と分析ができなかったものである。従って、まず本稿（前編）では、報告者として最低限の責任

を果すべく、未報告のまま残された出土土器の資料を呈示し、(後編)において既報告資料を含めた若干の考察を行うこととした。資料呈示を行うのは次の2遺跡である。

(1) **聖人塚遺跡**(コード№217—009) 柏市大青田字聖人塚694外(調査面積43600m²)

(2) **中山新田Ⅰ遺跡**(コード№217—005) 柏市十余二572外(調査面積23500m²)

3. 資料の呈示(補遺)

(1) 聖人塚遺跡出土土器

各時代の遺構が検出された中に、中期前半期の遺構として竪穴状遺構4基、埋甕土壙1基が含まれる(第1図)。遺構の分布は、崖線から比較的離れた平坦部に散在し、その周囲から該期の土器が散漫に出土した。遺構出土資料及び、若干の包含層から出土した完形資料は既に報告を終えているため、ここでは遺構外出土の土器に限って呈示する。

第6群土器

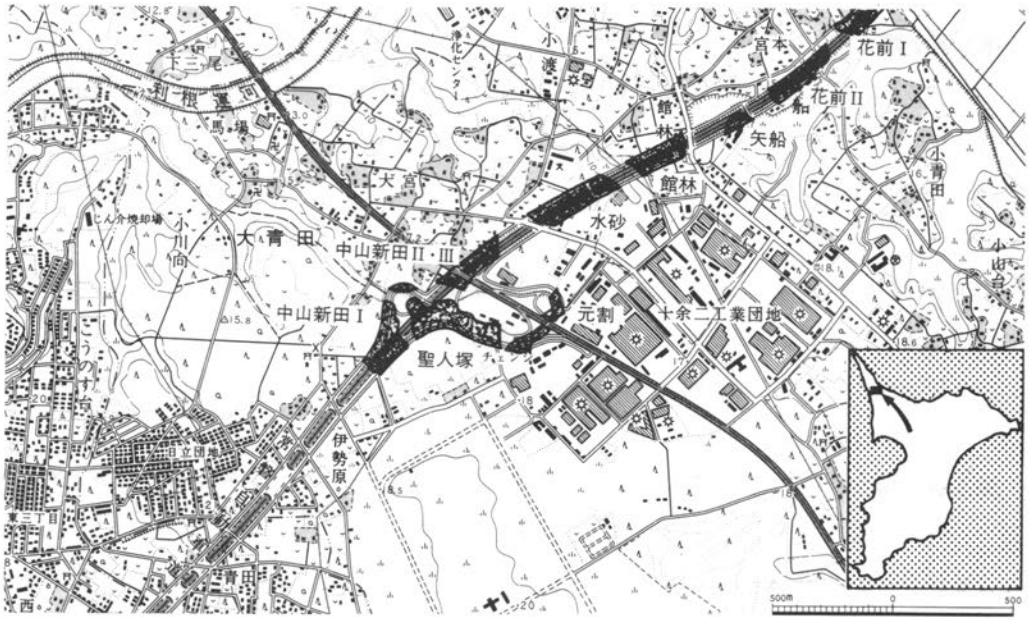
本群は中期初頭五領ヶ台式及びその直後の土器群と、中期中葉勝坂式末葉からいわゆる中峠式期の土器群に大別される。遺構出土資料を含め4420点が出土しているが、量的にはその殆んどが後者の土器群で占められる。ここでは稿の性格上、前者の土器群のみを扱い、その型式的属性に基づいて更に類別を試みた。

第6群1類土器(第2図1～40):五領ヶ台式土器のうち、その新しい部分を除くもの。強いて言えば五領ヶ台式古・中段階の資料が主体を占める。

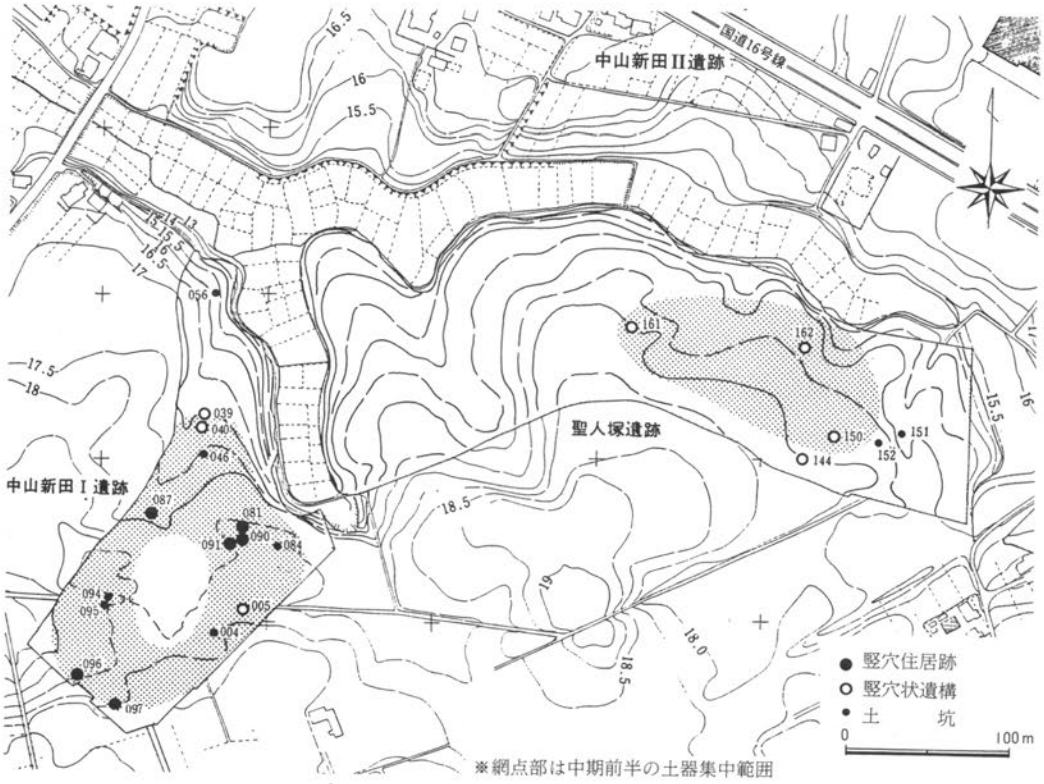
斜位の平行沈線を地文に、三角形陰刻文を施す1・2、頸部に竹管内面施文による波状文が巡る3・8、C字形爪形文で刻まれた横位隆帯の下に、格子目状沈線が施された4、口縁部に縦位の短沈線を施し、以下平行沈線文と交互刺突文を施す5・7は、本類の中でも古手な様相を示す。特に五領ヶ台Ⅰb式(今村、1985)に対比される1・2等は、聖人塚遺跡の五領ヶ台式土器の時期的な上限を示している。

9～23は粗雑な沈線で区画文を描き、三角形陰刻文が加えられた土器を含み、小波状の沈線文と爪形状刺突文が複合する16、沈線に沿って円形刺突文を付随させる22等がある。無文部が目立つ24～27、単沈線による渦巻文を施す28と共に五領ヶ台式中葉期の土器であるが、文様帯構成は知り得ない。

29～35は地文に単節縄文が施されたもの。縦位の結節縄文と三角形陰刻文を持つ27、口唇部・頸部に刻目のある隆帯が巡る30を含む。この中には口縁部が強く外反し、頸部に崩れた波状の平行沈線文を描く31も含まれ、これはいわゆる在地色の強い土器として扱えるかも知れない。37～40は単節縄文が全面に施された土器である。なお、35の拓影は上下逆の可能性がある。



（A）常磐道柏地区の調査遺跡



（B）聖人塚・中山新田I遺跡：阿玉台式前半期の遺構・遺物分布

第1図　遺跡の位置と広がり

第6群2類土器（第2・3図41～79）：五領ヶ台式の新しい段階、地文に縄文を持つ土器をまとめた。これらは沈線文によるモチーフを描く41～71と、文様要素の一部に結節沈線文[註1]が加えられる72～79に二分される。

口縁の波頂部に「圭頭形」の突起（土肥、1981）が付く41・42、〝富士山形〟の突起上面に数条の刻み目が入る43・44・48等、波状口縁を呈する深鉢形土器と、平縁で太い沈線による文様が描かれた54～58・60、口縁下に三角陰刻文を連続して施す61～64、太く重畳した沈線で曲線文を描く66～71等、文様要素はバラエティーに富む。

また72～79は沈線文と結節沈線文の両者が施された土器で、三角形陰刻文が多用される73・74・76が含まれる。

第6群3類土器（第4図80～95）：五領ヶ台式の新しい段階と、その直後に位置づけられる土器で、地文の縄文を欠くものをまとめた。2類土器と同様、沈線によるモチーフを描く80～88と、それが結節沈線に置換された89～95に二分される。器形の上からは大形の波状口縁の深鉢80～85、89～91と、平縁の86～88・93に分けられるが、前者には口縁の波頂部に左右非対称の小突起が付される例が多い。

文様モチーフは多様で、80・82・85・89のように沈線で幾何学的な文様を描き、その間隙に三角形陰刻文を描くものや、波頂部下に渦巻文を描く83・90等がある。87は区画文の特徴から、阿玉台Ⅰａ式の楕円形区画文の萠芽を思わせる。

小結：聖人塚遺跡出土の第6群土器は、断片資料にとどまる1類土器は措くとして、2・3類土器を五領ヶ台式土器の新しい部分、今村分類のⅡｃ式以降、多摩丘陵方面で「神谷原式」と呼ばれる土器群（新藤・中西他、1982）から、阿玉台Ⅰａ式直前の土器までを多彩な形で含んでいる。五領ヶ台式から阿玉台式への土器型式の変遷は、最近も（谷井、1985）で指摘されたように、西村正衛氏による白井雷貝塚（西村、1954）の報告以降、東関東地方の様相も次第に明らかになりつつある。当遺跡出土土器も第6群2類土器：地文縄文＋沈線文⟶無文地＋結節沈線文、第6群3類土器：無文地＋沈線文⟶無文地＋結節沈線文と、地文・文様要素の双方でその変化を追うことができる。これは五領ヶ台Ⅱ式土器の型式組成中に普遍的な、地文に縄文を多用する手法が次第に衰退し、それと期を一にして文様要素としての沈線文が結節沈線文に移行していく傾向を示すものである。それと共に口縁部の「圭頭形」突起や左右非対称の小突起も、この時期通有の装飾手法として注目する必要がある。これら諸特徴は、次の阿玉台Ⅰａ式以降、阿玉台土器様式の中で次第に陶汰され、楕円形区画文を基調とする口縁部文様帯の成立で、ほぼ完全に駆逐されてしまうらしい。

なお、本群1～3類土器は、胎土に白色小礫を多く含み、堅緻な焼成の個体が目立つ。素地中の雲母混入が顕著で比較的軟質な感じを持つ第7群土器とは、胎土の上からも判別が容易な

土器群である。

第7群土器

阿玉台式土器各段階の資料を本群とした。遺構内出土資料を含め総数6537点がある。文様要素・モチーフから類別を試みた。阿玉台Ⅰａ式直前からⅠｂ（古）式を中心とした資料である。

第7群1類土器（第5図96～116）：結節沈線による文様表出が特徴的で、先述の第6群3類土器と型式的に近接した位置づけを持つ。地文の縄文は完全に姿を消す。阿玉台Ⅰａ式の標準資料とされる白井雷貝塚第8類土器のうち、（西村、1984）で〝より古式の要素を持つ一群〟として分離された土器群に相当する。阿玉台Ⅰａ式直前の土器である。

大きな波状口縁を持つ深鉢形土器が多く、台形状の波頂部に数条の刻目のある96～98、左右非対称の突起を付けた99～103・109～111・114、一対の耳状突起を飾る106・107や、圭頭形突起を持つ113等がある。口縁部下に単列の結節沈線による幾何学的な文様を描くが、それが楕円区画文として完結することはない。113のように低隆帯に沿って結節沈線文が施された土器も含まれる。

第7群2類土器（第5・6図117～140）：口縁部が直立、或いは浅く内弯し、そこに単列の結節沈線によって楕円形区画文、及びそれに似たモチーフを描くもの。（西村、1972）による阿玉台Ⅰａ式土器に相当する。

口縁部が緩やかな波状を呈する117～121・127と、平縁の122～126・128～139、さらに左右非対称の小突起が付く138がある。波状口縁を呈する土器には、その波頂部に上面観三角形の平坦な凹部を持つ117、平縁の土器には蕨手状の貼付隆帯を加飾した126、陰刻手法でＹ字状垂下文を表出した122、口唇部上面に細い粘土紐を波状に貼付した139がある。117は口唇部内面にも半肉彫的な彫刻文を施したもので、本群1類の116と共通する。また139・140は貼付隆帯による枠状化した区画文が表出され、楕円形区画文のモチーフに近い。

なお、聖人塚遺跡ではこの段階の完形土器を伴う埋甕土壙が1基及び、竪穴状遺構4基が発見されている（第21図）。

第7群3類土器（第9図195～203）：低平な貼付隆帯のみが付加された195～202と、全くの無文土器203を便宜的にまとめた。203が阿玉台Ⅰｂ式に属する可能性を持つ他は、いずれも阿玉台Ⅰａ式の範疇に含まれる資料と思われる。

左右非対称の口縁部突起が特徴的な195～198、平縁で隆帯によるＹ字状垂下文が施された202等があり、いずれも本群1類土器または2類土器の型式組成中に組み込まれる可能性が高い。

第7群4類土器（第6～8図141～185）：平縁か、緩やかな波状口縁を呈する深鉢形土器で、隆帯による楕円形区画文が表出され、それに沿って単列の結節沈線文が巡るもの。頸部がくびれ、口縁部の文様帯部分が強く外反、内弯するものが多い。西村編年による阿玉台Ⅰｂ（古）

式に対比される一群である。

口縁部の楕円形区画文が崩れ、そこに弧状の結節沈線文を連続して施す143・147・156・163や、斜位の結節沈線文が楕円形区画文内に加飾される157・175・176、更にそれらが複合した145等、バラエティーに富む。いずれもくびれた頸部に貼付隆帯を巡らし、それを界線として口縁部文様帯が独立している点で、第7群2類土器との区別が可能である。胴部以下にはヒダ状指頭圧痕文が重畳する例が一般的だが、159・172・174のように、胴部にも結節沈線による文様を飾る個体も散見される。口唇内面への文様施文は減少するが、153・172のような少数例もある。

第7群5類土器（第8・9図191～194）：口縁部に大形の扇状把手や、花弁状に開く突起が発達するもの。口縁部の突起・把手を文様の割付線として用い、隆帯による楕円形区画文と、それに沿って単例の結節沈線文が多用される。阿玉台Ⅰb（新）式に比定される土器である。

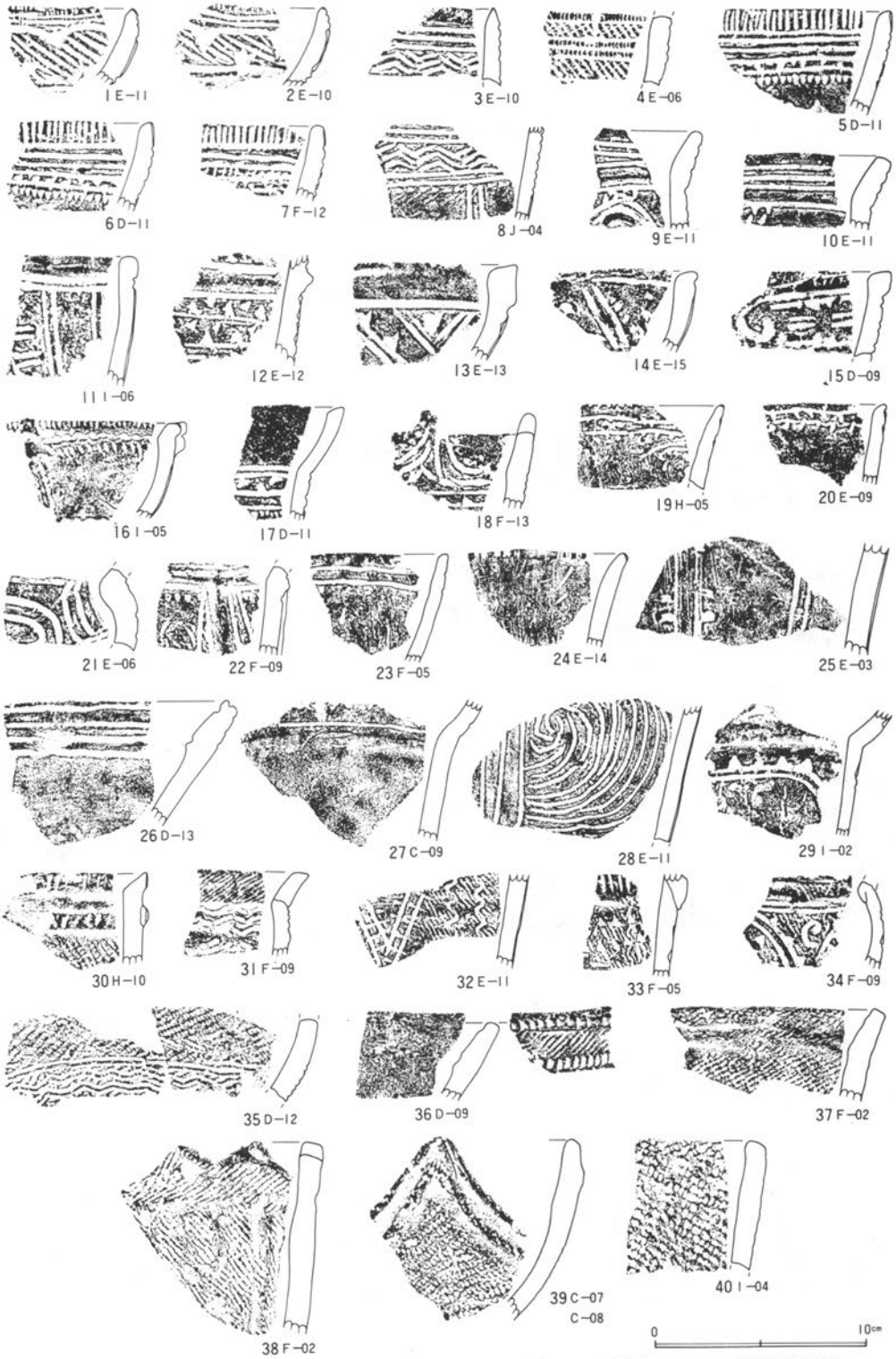
扇状把手上面に、ペン先状工具による細い結節沈線文が用いられ、胴部に施された結節沈線文との使い分けが行われた186・187を含む。これらは新しい文様要素の導入として注意される。

第7群土器　胴部片（第9図204～217）：本群4・5類土器、即ち阿玉台Ⅰb式の胴部片を一括した。これらの土器は、口縁部文様帯に型式分類のメルクマールが集約された個体が多く、詳細な型式細別には耐えない。

ヒダ状指頭圧痕を地文に、断面三角形の低平な隆帯で楕円形の枠状文、垂下文を描き、それに沿って結節沈線文を加飾する204～213、結節沈線により円形状の幾何学的モチーフを描く214、ペン先状工具による連続刺突文を持つ215と、垂下隆帯のみの216・217がある。なお、217は胴部下半にスリット状の刻目文（貝殻腹縁文）が連続する土器で、指頭圧痕文が刺突文に転化した、文様要素としては新しい段階に属するものである。

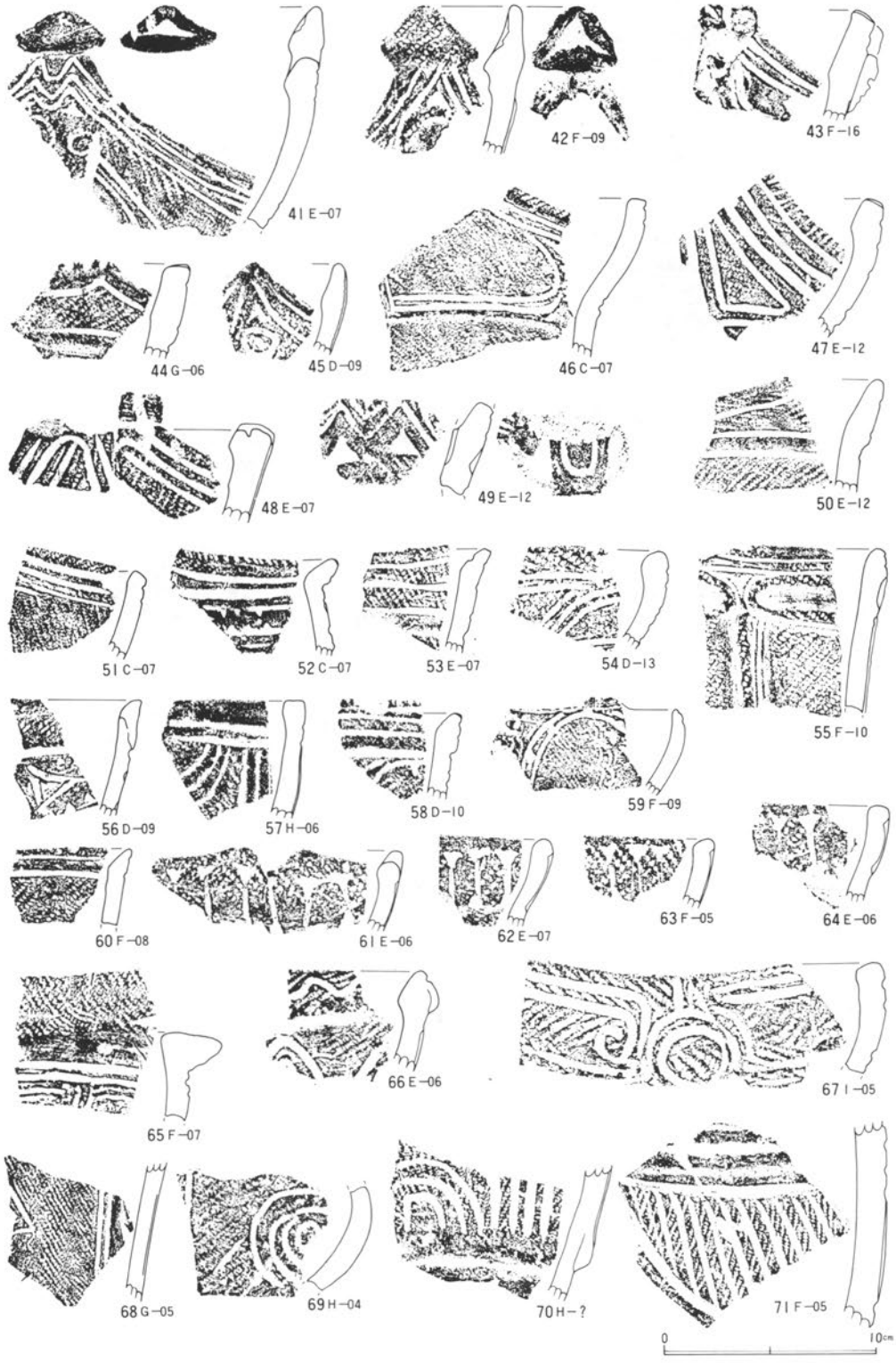
小結：以上、聖人塚遺跡出土の第7群土器を、口縁部片を中心に類別、報告した。このうち特に注目されるのは、阿玉台Ⅰa式及びその直前期に属する、第7群1・2・3類土器の存在である。資料の類別は、主に口縁部の文様モチーフ、特に結節沈線文による区画文様出の在り方をその基準としたが、土器自体の変化は漸移的であり、各資料を截然と分類することはできない。しかし先の第6群3類土器から、第7群1類土器への型式変遷は、口縁部の楕円形区画文・枠状文の萠芽という文様モチーフ上の展開のみならず、胎土の特徴等からも、比較的明瞭に把握できる。

それに比べ、第7群1類土器以降、楕円形区画文及びそれに近い文様が成立する同群2類土器＝阿玉台Ⅰa式土器、更に貼付隆帯による楕円形区画文が完成する同群3類土器＝阿玉台Ⅰb（古）式土器への移行は、極めて漸移的に進行している。この両者の細別は、口縁部文様帯としての楕円区画文の成立や、結節沈線文による枠状文の確立、あるいは口縁部の「圭頭形」、左右非対称突起の有無と言った、感覚的な文様要素に頼らねばならないようである。

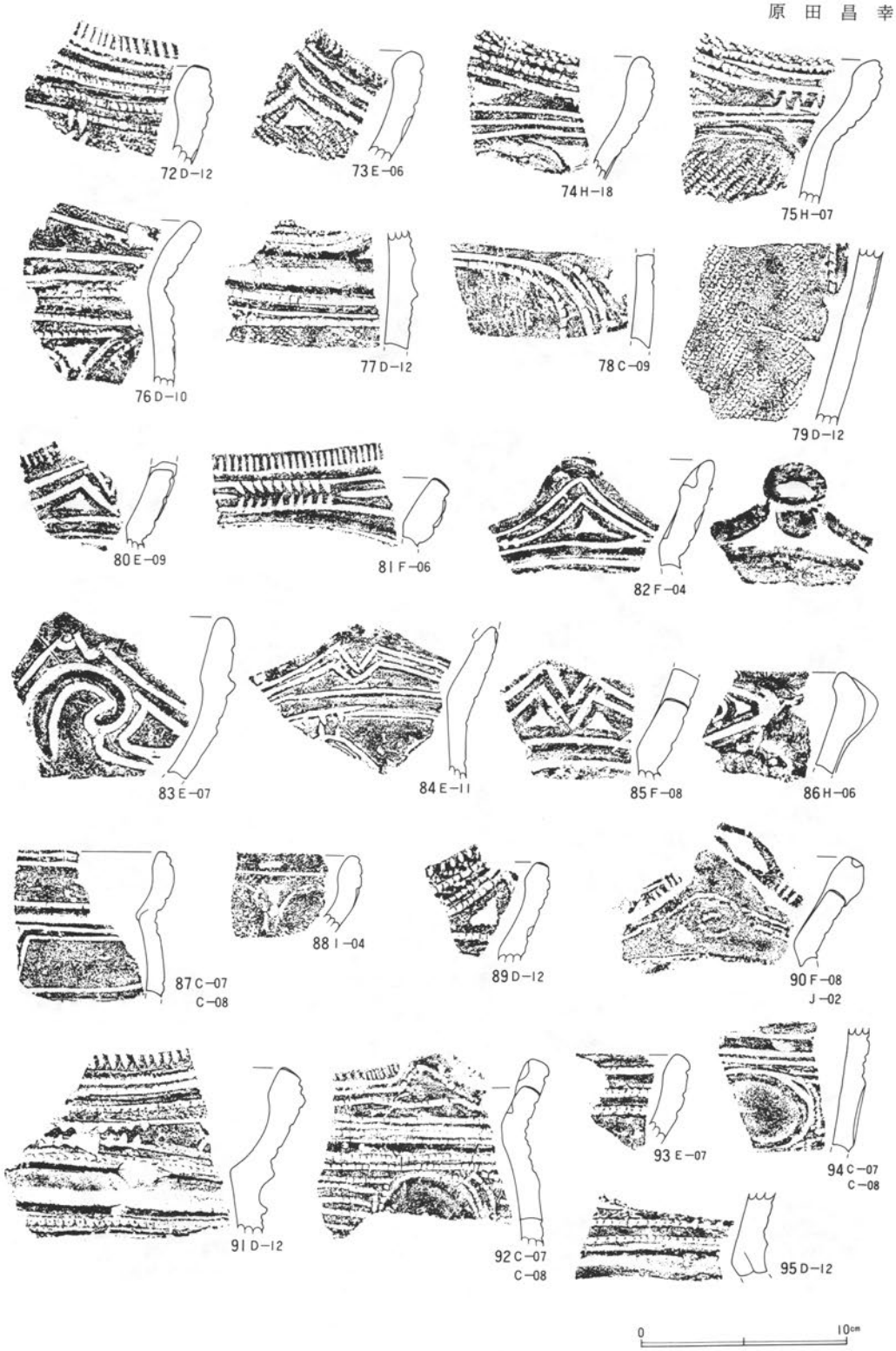


※資料番号の後の記号は出土グリットを示す(グリッド配置については報告書参照)。

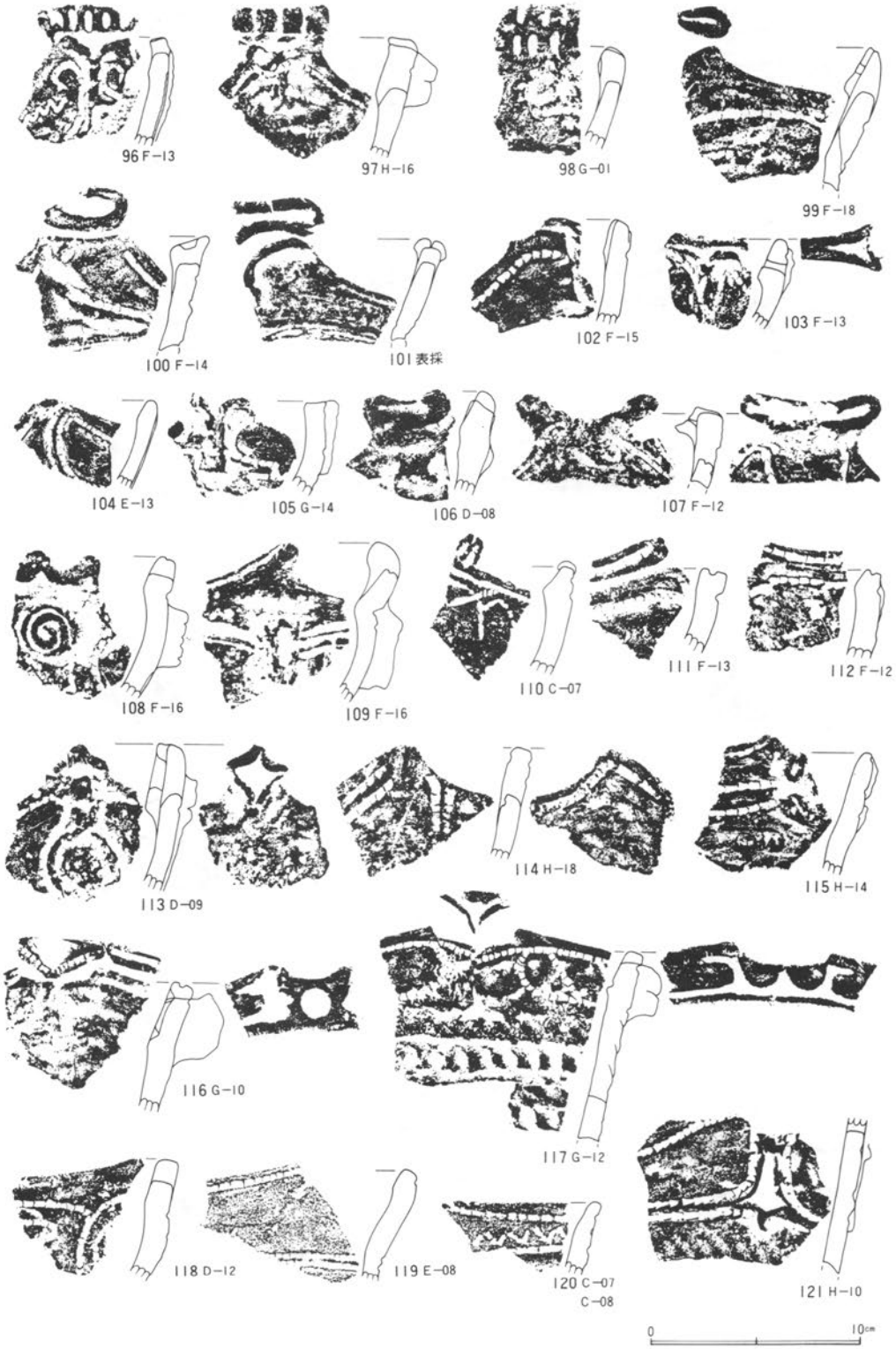
第2図　聖人塚遺跡出土土器(1～40：第6群1類土器)



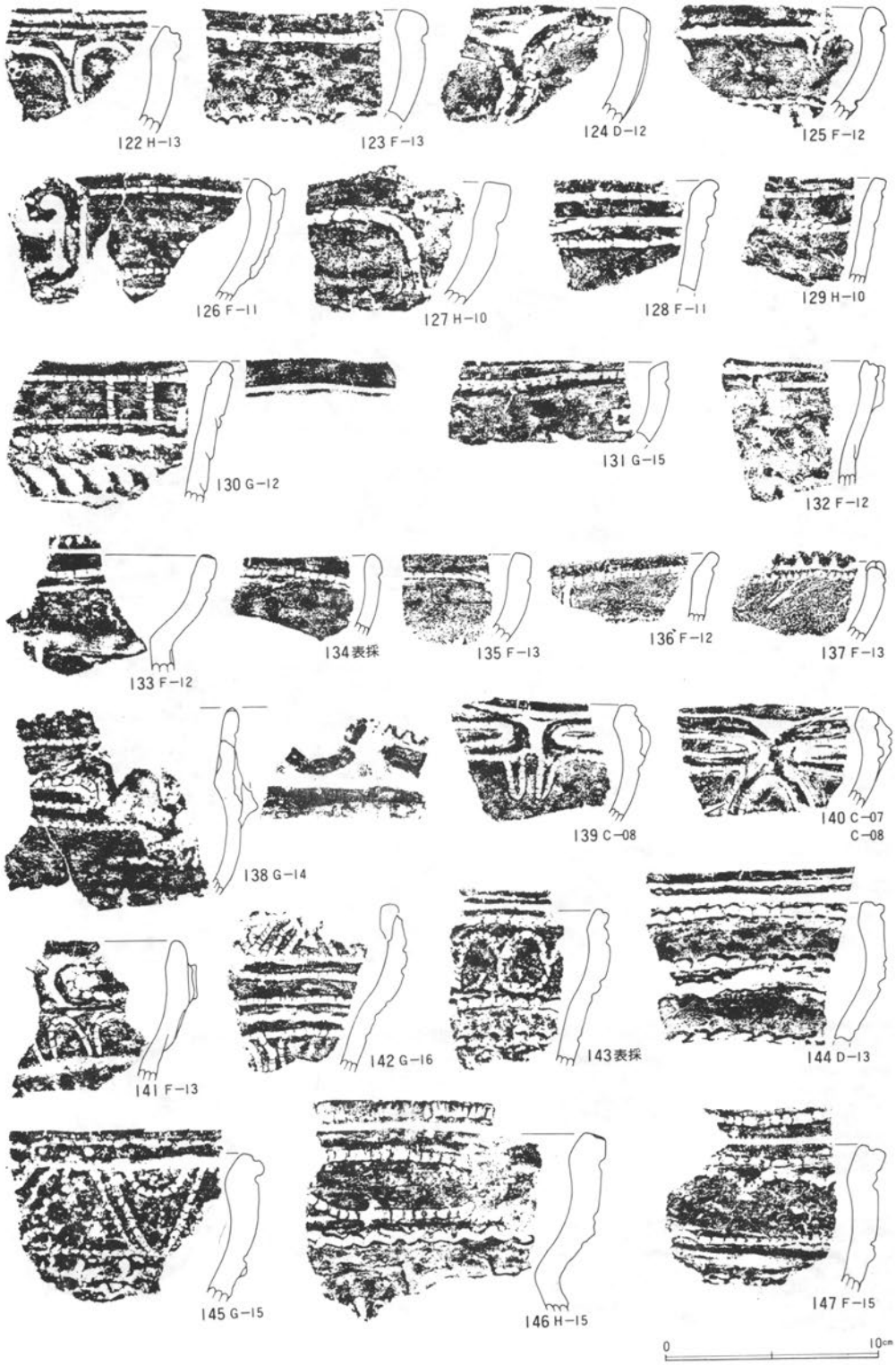
第3図　聖人塚遺跡出土土器(41〜71：第6群2類土器)



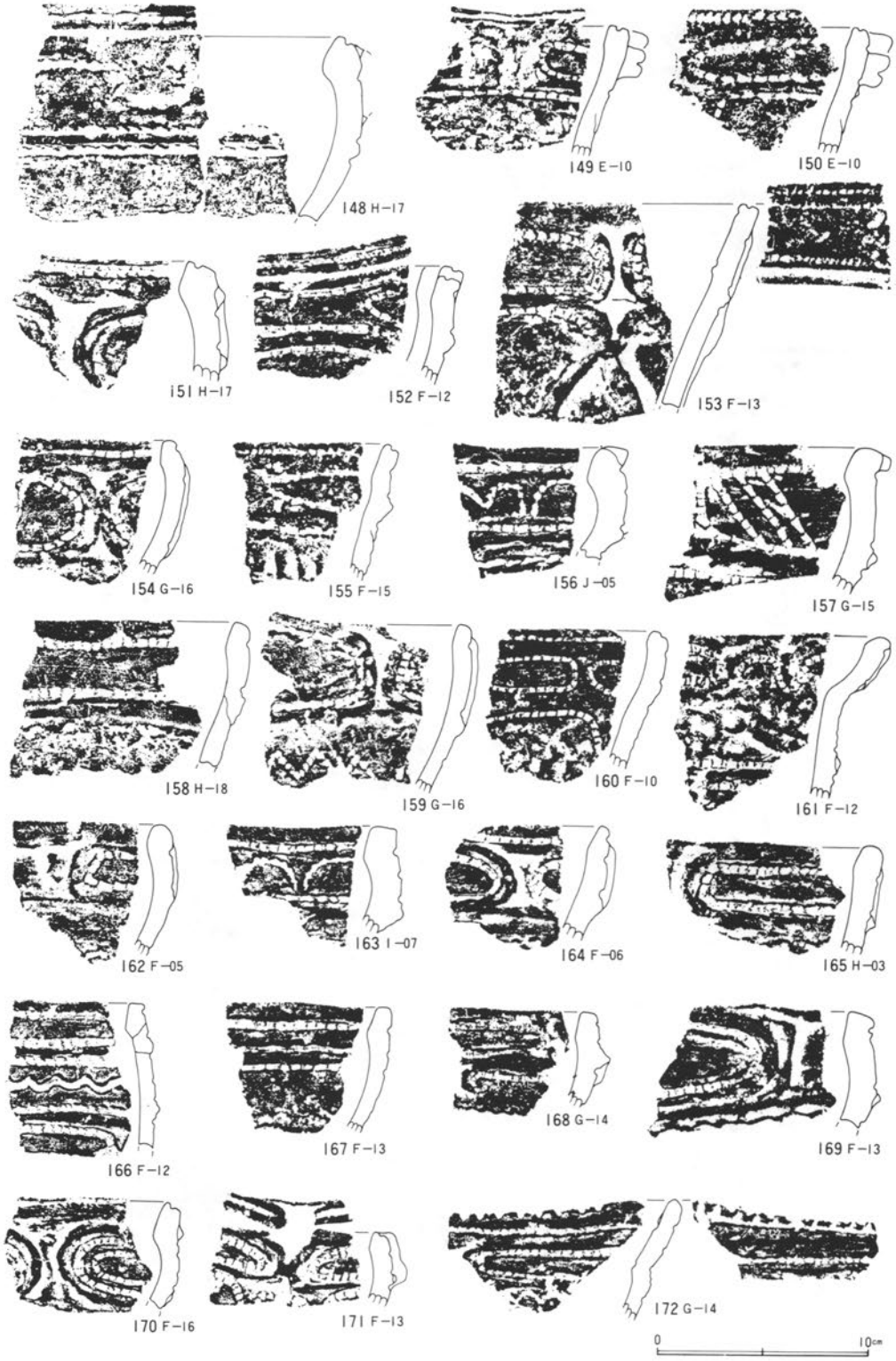
第 4 図　聖人塚遺跡出土土器(72〜79：第 6 群 2 類土器，80〜95：第 6 群 3 類土器)



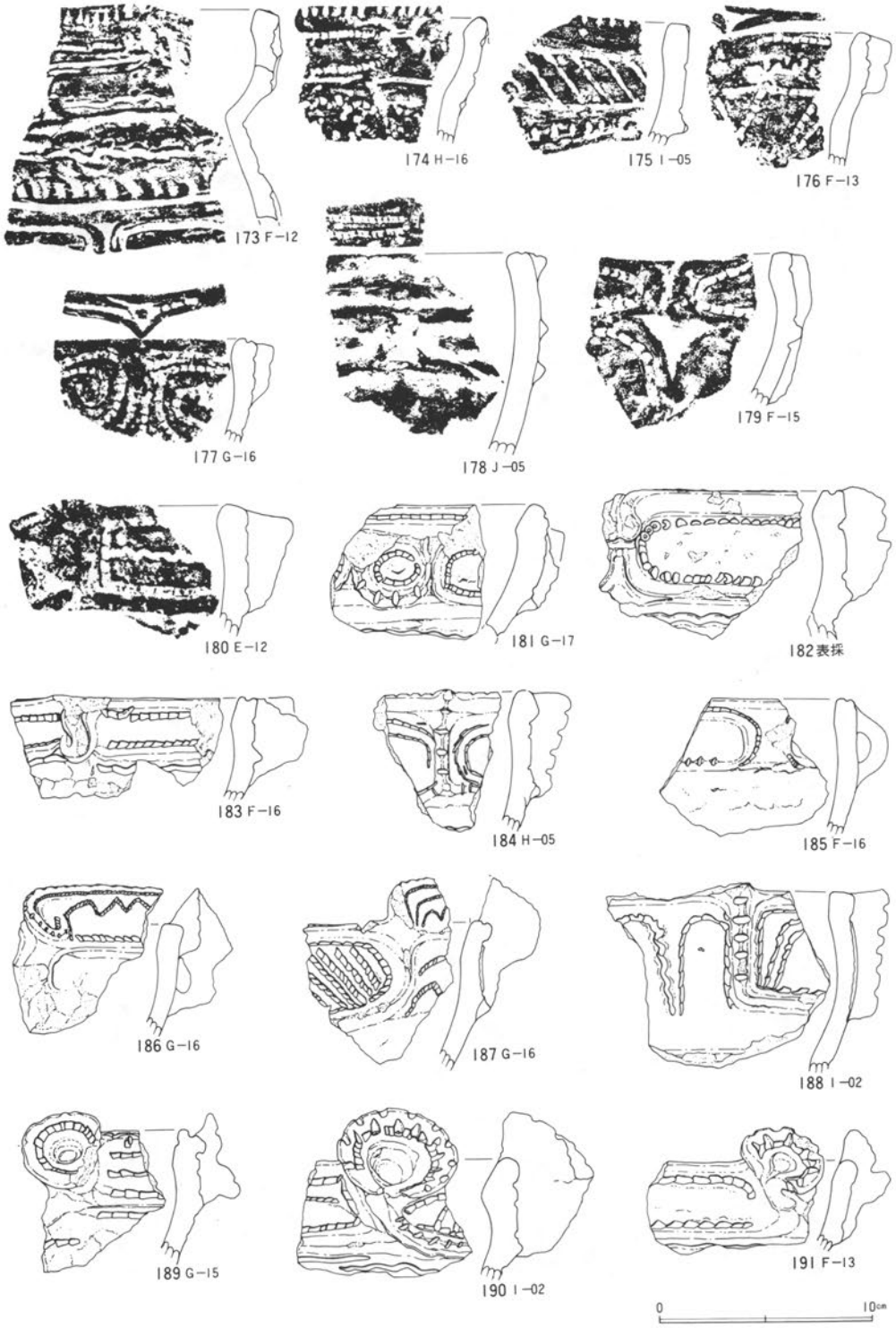
第5図　聖人塚遺跡出土土器(96～116：第7群1類土器，117～121：第7群2類土器)



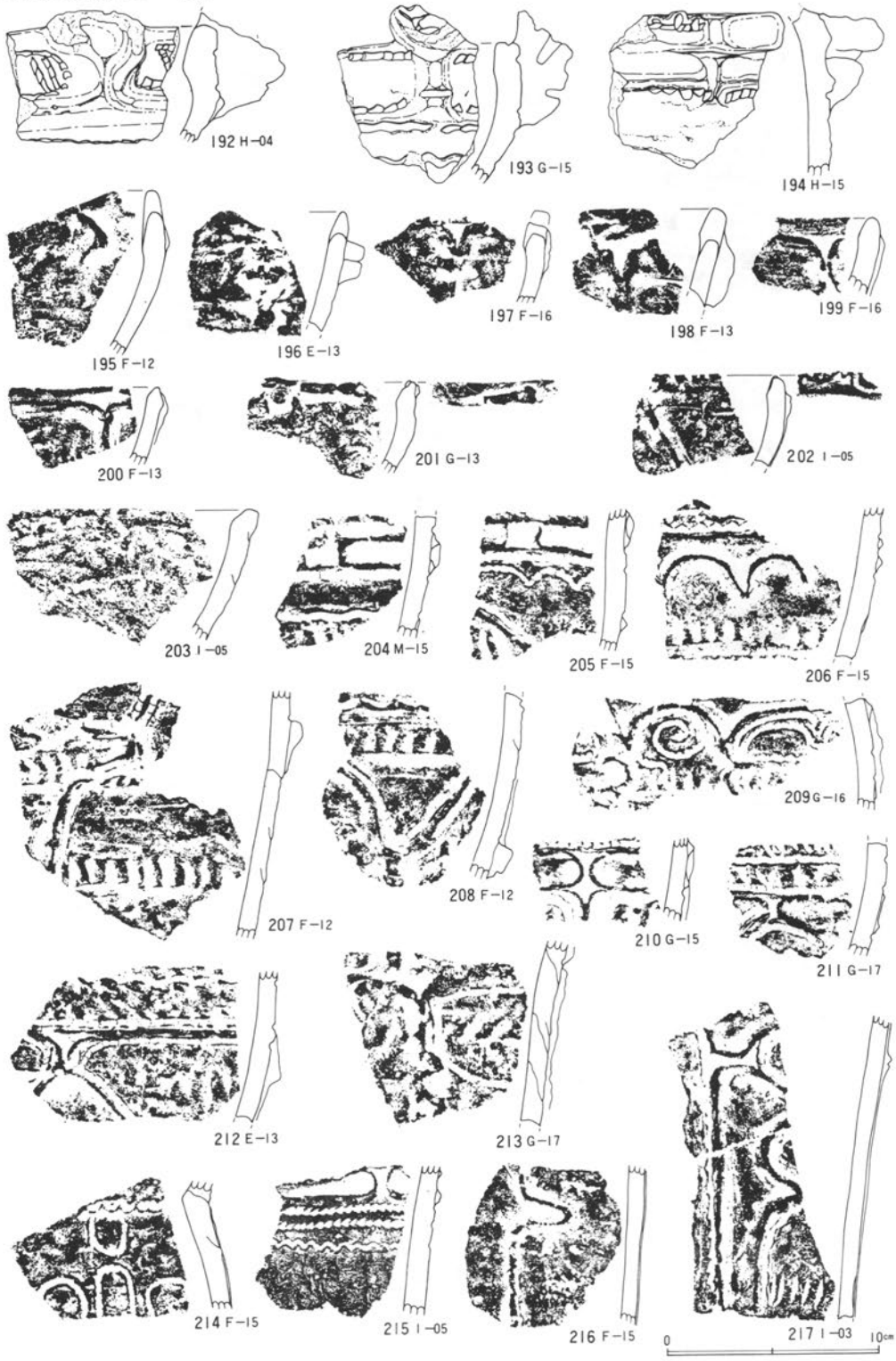
第6図　聖人塚遺跡出土土器(122～140：第7群2類土器，141～147：第7群4類土器)



第7図　聖人塚遺跡出土土器(148～172：第7群4類土器)



第8図　聖人塚遺跡出土土器(173～185：第7群4類土器，186～191：第7群5類土器)



第9図　聖人塚遺跡出土土器(192～194:第7群5類土器, 195～203:第7群3類土器, 204～217:第7群土器胴部)

(2) 中山新田Ⅰ遺跡出土土器

中山新田Ⅰ遺跡からは中期前半の竪穴住居跡5基、いわゆる「小竪穴」の範疇で捉えられる竪穴状遺構4基、及び土坑6基が検出され、それに伴う多量の遺物が出土した(第1図)。遺構の配置は、谷津に面した凹地を中心に、ほぼ環状に巡るが、集落としての継続期間は比較的短い。ここでは未報告のまま残されていた遺構外出土土器を呈示する。

第6群土器

中期初頭の五領ヶ台式から勝坂式に至る土器群。後者は時期的に、後述の第7群土器各類と併行する。遺構出土資料を含め、総計2,571点が出土した。時期細別の結果、五領ヶ台式の資料は少なく、中部地方・西南関東地方に分布的中心を置く狢沢式・新道式に併行する土器が多い。

第6群1類土器（第10図1～26)：五領ヶ台式土器中段階を中心とした資料が主体を占める。竹管内面施文の沈線を口縁部直下に施し、その下に格子目状文を充塡する1・2、同様の施文手法で頸部に連続山形文を巡らせる3等は、中でも古手の文様要素である。6～8もこれと同様な胴部片。

7～13は縦位・横位の区画文が複合し、その内側に刻目状の刺突文が加飾されるもの。区画文としての隆帯は竹管内面施文による断面半円形を呈し、14もその胴部片と思われる。15～18は粗い無文地に平行沈線で直・曲線文を表出する土器、19～24は斜縄文地に沈線、或いは連続C字状爪形文で文様を描く土器である。底部片26には、網代圧痕が観察される。

第6群2類土器(第10図27)：五領ヶ台式土器の新しい段階と、その直後に位置づけられる土器。中山新田Ⅰ遺跡では僅少で、縄文地に結節沈線文が垂下する27の他は、ほとんど出土していない。

第6群3類土器（第10･11図28～37)：単一工具による結節沈線文と、曲線的モチーフを描く貼付隆帯で飾られる土器。文様の特徴から、いわゆる「鳴神山系」の土器を含む、非阿玉台系の一群である。文様要素は第7群土器と共通するが、縦割区画文や、無文部を極力残さず、その全面に文様が充塡される手法から区別することが可能である。

比較的太い貼付隆帯で、胴部文様を縦割りにし、それに沿って左右非対称の結節沈線によるモチーフを描く28～30・34・35、刻み目のある波状口縁を呈し、その波頂部直下に結節沈線で渦巻文を描く31、左右非対称の口縁部突起を持つ32・33・37、獣面様の小把手で、頂部に渦巻文を飾る36がある。

第6群4類土器(第11図38～57)：単一工具による結節沈線で枠状の区画文を描き、その内側に同じ施文具による円形刺突文を充塡する土器。中部地方に分布的中心を置く狢沢式(古段階)、南西関東地方で勝坂式直前に位置づけられる一群である。

尖頭状の波状口縁を呈す38、口縁部下に結節沈線で楕円形・矩形枠状文を描き、その内部に

円形刺突文が充塡された40～47、口縁部直下に数条の結節沈線を横走させ、その下に円形刺突文帯を構成する48～52がある。53～57は胴部片であるが、無文部を極力残さない。

第6群5類土器（第11・12図58～68）：単一工具による結節沈線文を密に施文し、横位の区画文を基調に、その内部にも結節沈線文を施すもの。本群4類土器と同様、狢沢式（古段階）ないしは勝坂式直前の土器群に対比される。

結節沈線による波状文と、Y字状の垂下文が表出される61、胴部に渦巻文を持つ68の他、垂下隆帯が特徴的な59等がある。60・62・64から考えて、口縁部以下胴部（上半）にまで、横位の楕円区画文帯が重畳する土器群と思われる。

第6群6類土器（第12・13図69～82・96～100）：結節沈線文に加えて、幅広のいわゆるキャタピラ文が併用される土器。楕円形枠状文が主文様となる狢沢式（新段階）と、三角形の枠状文が発生する新道式土器に相当する。

口縁部直下にキャタピラ文・結節沈線文で弧状の区画を施し、その中央に玉抱三叉文を充塡する69・70、捻り餅状の隆帯を付加した71・72等も含まれる。96～100は胴部片で、胴部にも枠状の区画文帯が重なるが、このうちには矩形枠状文が特徴的な100もある。

第6群7類土器（第12・13図83～95・101～104）：ペン先状工具による結節沈線文（三角押文）が主な文様要素として多用され、それに幅広のキャタピラ文が付随して用いられる土器。中部地方の新道式、関東地方の勝坂Ⅰ式に対比される。

口唇部に肉厚な隆帯による装飾が付く83～89、隆帯による曲線文が施された胴部破片90～92、横位または縦位の直線的なモチーフを表出する93～95の他、低平な隆帯で楕円形文を胴部に持つ101・102等がある。

第6群8類土器（第13・14図105～122）：単一工具による結節沈線文と貼付隆帯によって、口縁部文様帯を構成する一群。第7群＝阿玉台系土器と文様構成上では共通するが、枠状文内にも結節沈線を密に充塡する特徴から第6群土器の範疇で扱った。系統的に、阿玉台式土器と狢沢・勝坂式土器の折衷様式として捉えられるものである。

隆帯による楕円形区画文に沿って結節沈線が巡る105・106・109、口縁部の小突起と隆帯による円形貼付文が特徴的な107、結節沈線文が数条横走する110・111・116、上下の結節沈線文間に、同じく結節沈線で入組渦巻状文を描く118は、文様構成上狢沢・勝坂系の土器に近いもの、一方113～115・120・122はより阿玉台系の土器に近いものである。

小結：中山新田Ⅰ遺跡出土の第6群土器は、五領ヶ台式に比定される1・2類が少なく、その多くは3・4類土器で占められている。これらは文様要素の上から便宜的に細別した5～9類土器と共に、結節沈線をその主な文様要素とする点で、第7群＝阿玉台式土器と共通する。しかしその文様モチーフ、文様帯構成上、第7群土器から峻別されることは明らかであり、系

統的には中部地方狢沢式・新道式から勝坂Ⅰ式土器の型式組成に含まれるものである。これらは、いわゆる〝勝坂系列〟の土器として総称されることが多いが、本群各類も、その文様要素の検討によって、各細別型式に対比することができた。

つまり単一の工具による結節沈線文・刺突文で主な文様を構成する4・5類土器は、狢沢式（古段階）に、結節沈線文と共に幅広いいわゆるキャタピラ文が加えられた6類土器を狢沢式（新段階）に、そして更に新たな文様要素としてペン先状工具による三角押文が加わる7類土器を新道式・勝坂Ⅰ式として理解したのである。もとよりこれらの型式細別の指標には、①単一工具による結節沈線文を基本に、②幅広のキャタピラ文の導入、③ペン先工具による三角押文の採用という、文様要素の変化の方向性に、②段階における口縁部文様帯の変形、玉抱三叉文の発生という変化が考慮されている。そして、これらの変化はそのまま中部地方から西南関東地方に展開する、勝坂系土器群の変化の方向性として理解できるのである。

しかし、この中で本群3類土器に見られる肉厚で捻り餅状の貼付隆帯を持ち、他類の土器に通有な横位の文様帯区画文を欠く土器群は注意する必要がある。これらは胴部文様帯を縦方向に分割し、そこに極力無文部を排すかのように非対称充塡文が施される特徴を示す。この特徴は、もとより阿玉台式、狢沢式土器の型式内には自生しない。これらはかつて「鳴神山系」土器（高橋、1959）として注意されたものである。

また本群7類土器に含めた、胴部に矩形の区画文を重ねる100は、長野県岡谷市後田原遺跡（戸沢他、1970）で注意され、「後田原式土器」と仮称された特色ある資料である。この種の土器は、多摩丘陵の諸遺跡でも僅少であり、下総地方では更に稀少な出土例と言える。これら非阿玉台系土器の問題については、（後編）で再考する。

第7群土器

阿玉台式土器を一括する。中山新田Ⅰ遺跡出土遺物の主体を占め、総数19428点がある。この中には竪穴状遺構・住居跡合計9基から出土した多量の土器も含まれ、遺構出土資料（既報告）には復元可能な個体も多い。

第7群1類土器：いわゆる阿玉台Ⅰa式直前の土器。中山新田Ⅰ遺跡からは出土していない。

第7群2類土器（第14図123～132）：口縁部が直立あるいは浅く内弯し、そこに単列の結節沈線で文様が施されるもの。阿玉台Ⅰa式土器に比定。

結節沈線文が口縁部直下に横走するのみの128・129、口縁部の下に孤状の文様が施された123～127等がある。楕円形の区画文が文様モチーフ上完結していない土器が多く、また131・132のように楕円形区画文が成立しても、それを明瞭な貼付隆帯で囲繞するには至らない。台形状の口縁部突起を持つ130や、左右非対称の口縁部突起が特徴的な131・132も含まれる。中山新田Ⅰ遺跡では僅少な資料である。

第7群3類土器：阿玉台Ⅰa式前後の無文土器を本類としたが、当遺跡からの出土はない。

第7群4類土器(第14～16図133～180)：平縁か緩やかな波状口縁の深鉢形土器を主体に、貼付隆帯による楕円形区画文で口縁部文様帯が形成され、区画文の内側に単列の結節沈線が巡るもの。阿玉台Ⅰb式（古）に対比される一群である。

隆帯に沿う単列の結節沈線文で楕円形文を描く133～137を基本文様として、区画文内に様々なモチーフを描く土器が包括される。弧状の曲線文が連続する138、内部に1・2条の波状文が入る142～144、連続鋸歯状文的に直線文が充填される149・150・154～161、更に直・曲線文を組み合わせた結節沈線が描かれる153・163等がその好例である。また隆帯による楕円形文が表出されずに、横位の長い文様帯を結節沈線で埋める147・162～165は、比較的古相を示すものと思われる。この他結節沈線文が二重に施され、その内側の結節沈線が、区画文内で装飾的なモチーフを表出する166～175は、比較的新しい文様モチーフと考えることができる。

なお、口縁部に上面観が渦巻状の小突起を付した177は、より古い文様要素を残したものとして、また連続した三角形の区画文内にペン先状工具による三角押文を充填する179・180はより新しい文様要素を持つものとして注意される。

第7群5類土器(第16～18図181～213)：大形の扇状把手を持つ深鉢や、大波状口縁の深鉢形土器をまとめた。阿玉台Ⅰb（新）式土器として捉えることができる一群。

大形の波状口縁上に強く内側に張り出す扁平な突起を付加した182、波状突起を中心に結節沈線文による楕円形区画文・縦位集合沈線文等が描かれる183～188、比較的緩やかな波状口縁を持つ189・190・192～197、口縁の波頂部に花弁状の突起を付す191、規則的な細かい波状口縁を呈する198等、形態は変化に富む。しかし結節沈線は各々単一で、ペン先状工具との併用や幅広のキャタピラ文との複合は見られない。

一方199・201～209・211は本類土器の胴部片。断面三角形の隆帯と、単一工具による結節沈線文で複雑なモチーフを構成する。ただしこの中で206・208は、文様帯構成から見て本群4類土器＝阿玉台Ⅰb(古)式に属す可能性もある。また210は口唇内面にも沈線文が施されたもの。平縁の鉢形土器で、形態的には本群4類土器に近いが、文様モチーフの崩れ具合から古いものではなく、本類で扱った。

第7群6類土器（第18・19図214～230)：文様要素としての結節沈線文を持たず、貼付隆帯及びヒダ状の指頭圧痕文のみが施されるもの。時期的には第7群4・5類土器、阿玉台Ⅰb式の（古)・(新）両段階の型式組成中に含まれる。

口唇部に僅かな刻みが加えられた214、弧状の隆帯で頸部を飾る219の他、胴部に貼付隆帯で波状文を描く221、Y字状垂下文が貼付される222・226・227、指頭圧痕文のみの胴部片223・229・230が含まれる。阿玉台式土器の型式組成中、非装飾的な一群とされるものである。

第7群7類土器（第19•20図231～241）：阿玉台式各段階の浅鉢形土器を一括した。文様要素の特徴、施文部位の相異から、大きく外に開く口縁部を呈しその内面に結節沈線文が施された231～233、波状口縁の口唇上面に結節沈線を施す234、口縁が内屈しそこに結節沈線文で楕円形文を描く235～238・240、無文の239・241に分けられる。

この種の浅鉢形土器における口縁内面への文様施文は、西南関東地方では五領ヶ台式新段階以降、勝坂式直前期＝狢沢（新）式段階まで普遍的に見られる特徴で、口縁部が内屈する浅鉢形土器よりも型式的には先行するものとされている。本類の場合も、時期的には前者が本群2類に、後者が本群4類土器の型式組成中に含められる可能性が強い。

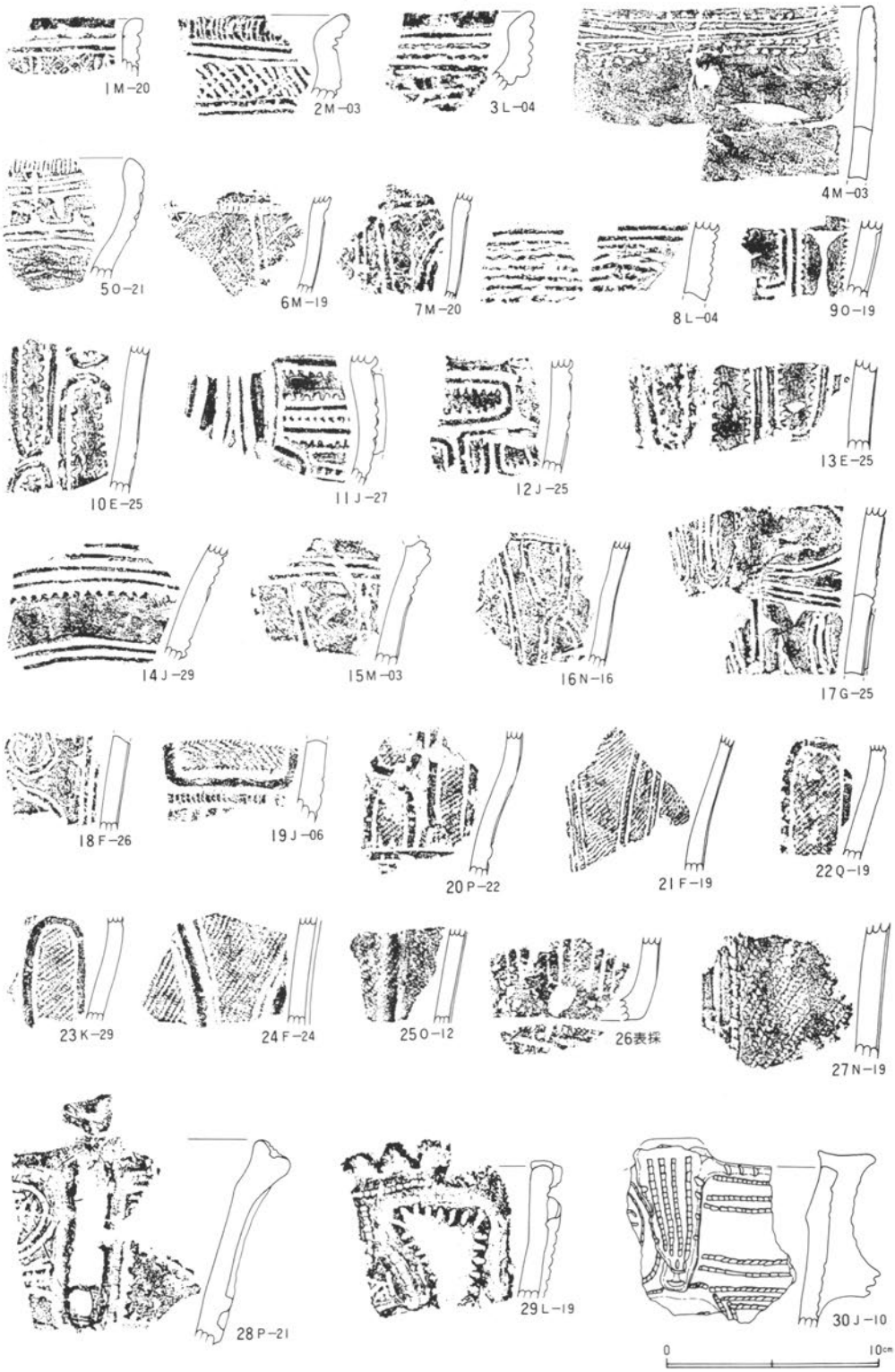
第7群8類土器（第20図242～254）：比較的太く、肉厚な貼付隆帯で、口縁部に楕円形区画文を主とする文様帯を構成し、それに沿って複列[註2]の波状沈線或いは結節沈線が施された土器。口縁部形態・文様要素が類似した無文土器、浅鉢形土器を含む。

阿玉台II式土器に属するもので、中山新田Ⅰ遺跡からは少量が出土したのみである。

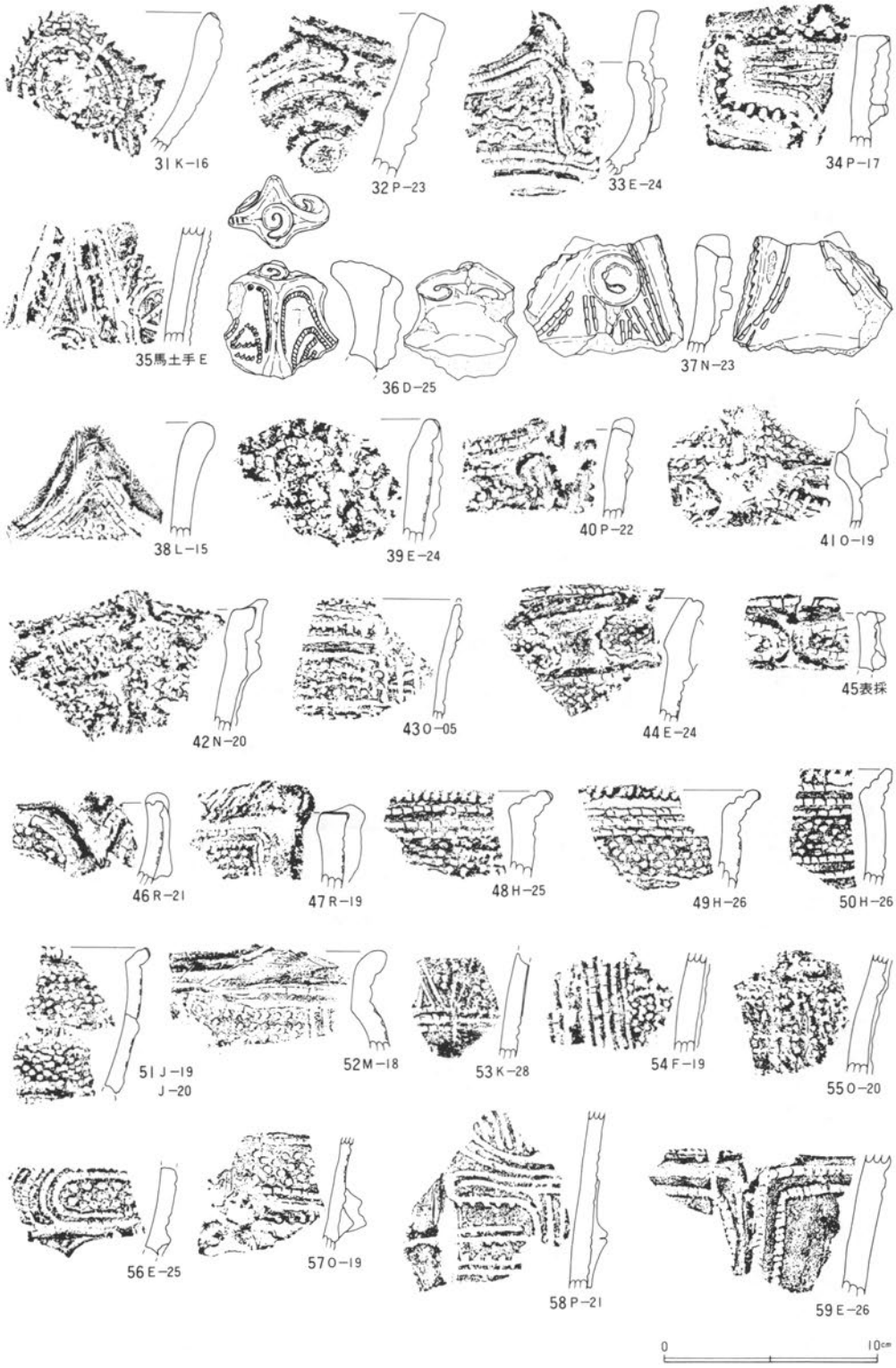
土製品（第20図255）：包含層出土資料の再整理によって、中期前半の板状の土偶腕部片が1点追加確認された。板状の腕部に結節沈線文が横走し、先端部がめくれ上るように隆起する。胴部を含め、他の部位を欠失するが、本来はかなり大形な土偶であった可能性が高い。

小結：中山新田Ⅰ遺跡出土の第7群土器は、阿玉台式土器前半期の各段階を網羅するが、その大部分は阿玉台Ⅰb式土器で占められている。この阿玉台Ⅰb式土器は、西村正衛氏によって、その型式表象から2分され、各々阿玉台Ⅰb（古）式、阿玉台Ⅰb（新）式と分類されてきた。古・新という同型式内における段階細別の基準は、文様要素・文様帯の在り方が比較的安定した該期の土器にあって、主に深鉢形土器が平縁・扇状の小突起を付すものから、大形な波状口縁・扇状把手の発達するものへという、変化の方向性に求められている。本稿では、この特徴に照らして、第7群4類土器を阿玉台Ⅰb（古）式、第7群5類土器を阿玉台Ⅰb（新）式と類別した。しかし、これらの土器も、より微視的に見れば、阿玉台Ⅰb（古）式段階の土器群中には、その前段階、阿玉台Ⅰa式土器に散見される、口縁部への左右非対称の小突起を付加する手法が残存したり、また扇状把手への発達を示す大形の口縁部突起が付される資料が含まれていたりして、必ずしも明確に全ての資料を峻別することは難かしい。

当遺跡出土の阿玉台Ⅰb（古）式土器の中には、こうした型式変遷の具体的な資料は177等、一部を指摘できるにとどまるが、量的に充実した阿玉台Ⅰb（新）式土器の在り方は、阿玉台Ⅰb式の型式内における（古）・（新）の段階差をはっきり示すものと考えられる。もとより阿玉台式土器の型式細別は、それが同一土器様式内の一連の〈変化の方向性〉に立脚するものであり、各細別型式が各々時間的独立性、型式組成上の単純性を持つものではない。こうした観点に立てば、阿玉台式土器各型式は、相互が主体・客体の関係をとりつつ、時間的序列の上に

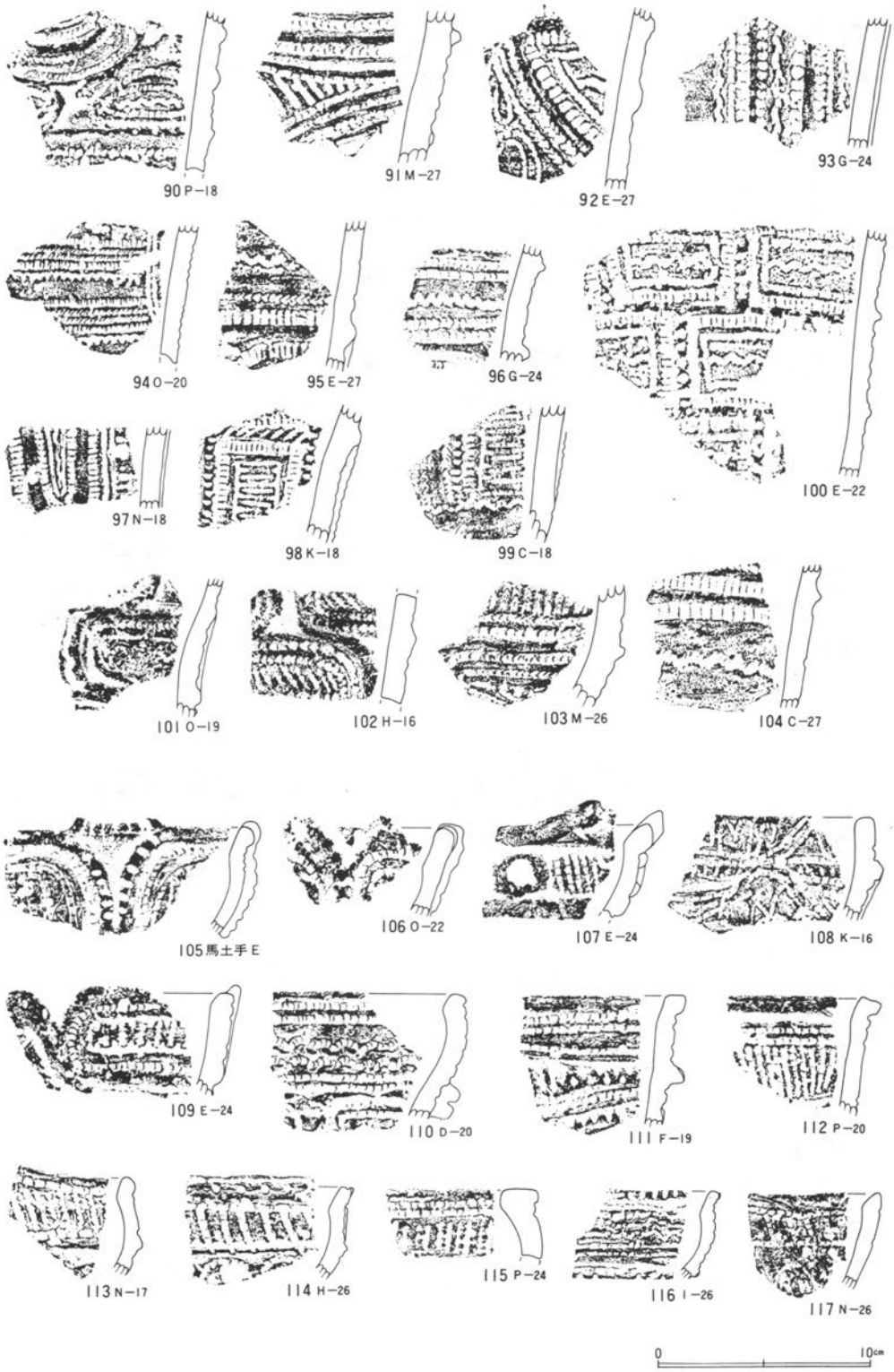


第10図　中山新田Ⅰ遺跡出土土器(1～26:第6群1類土器,27:第6群2類土器,28～30:第6群3類土器)

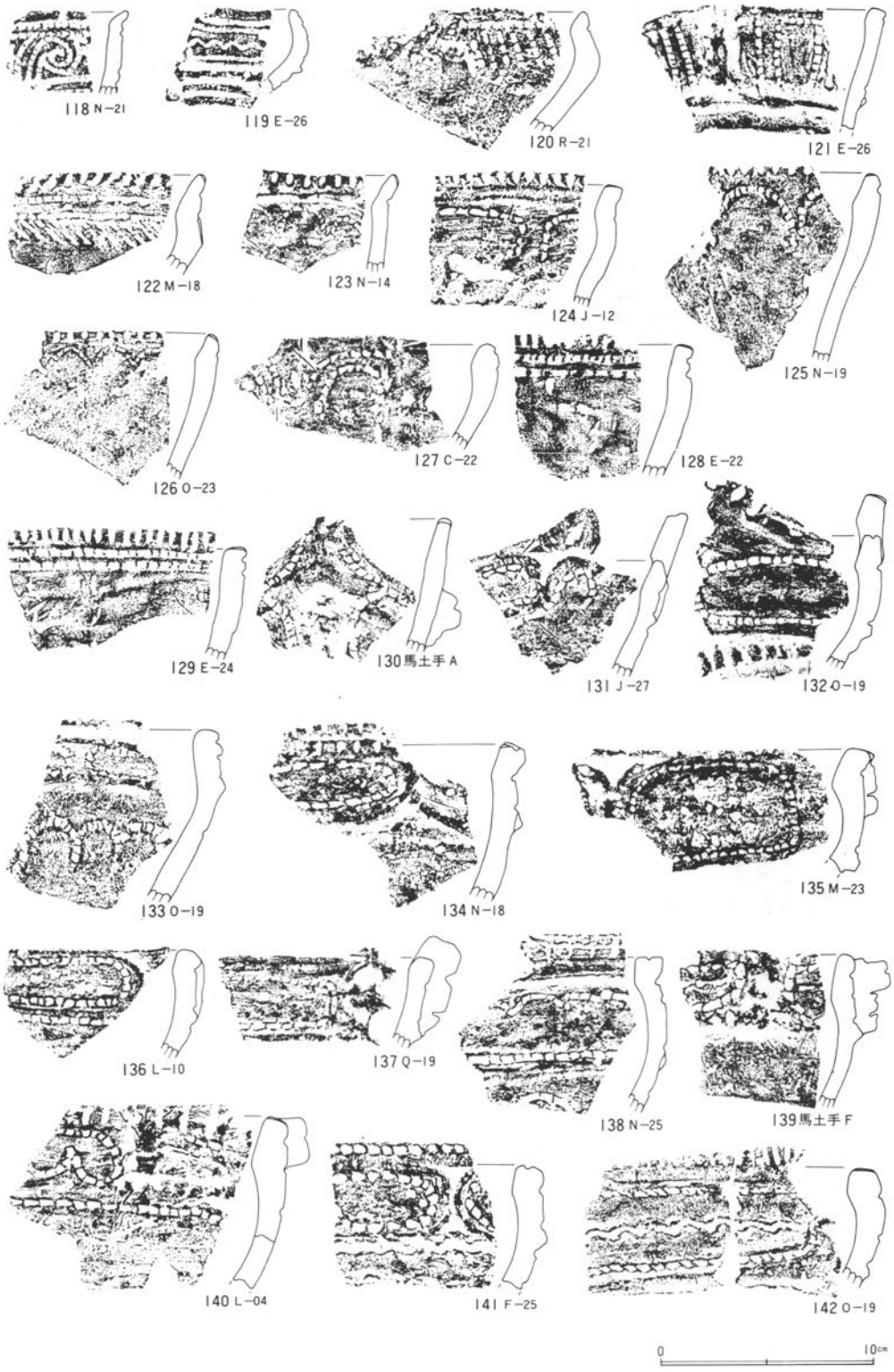


第11図　中山新田Ⅰ遺跡出土土器(31～37:第6群3類土器,38～57:第6群4類土器,58～59:第6群5類土器)

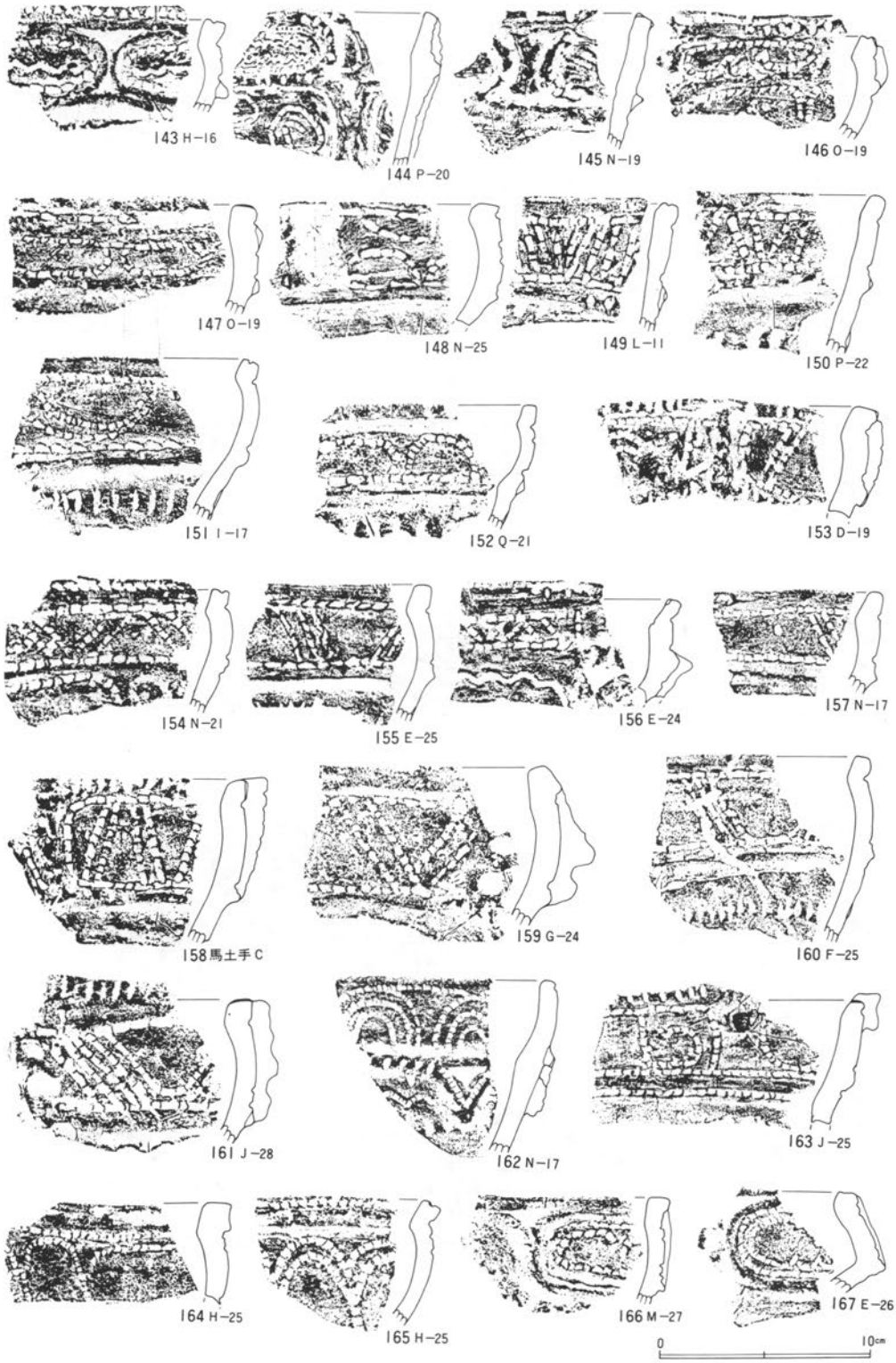
第12図　中山新田Ⅰ遺跡出土土器(60〜68:第6群5類土器,69〜82:第6群6類土器,83〜89:第6群7類土器)



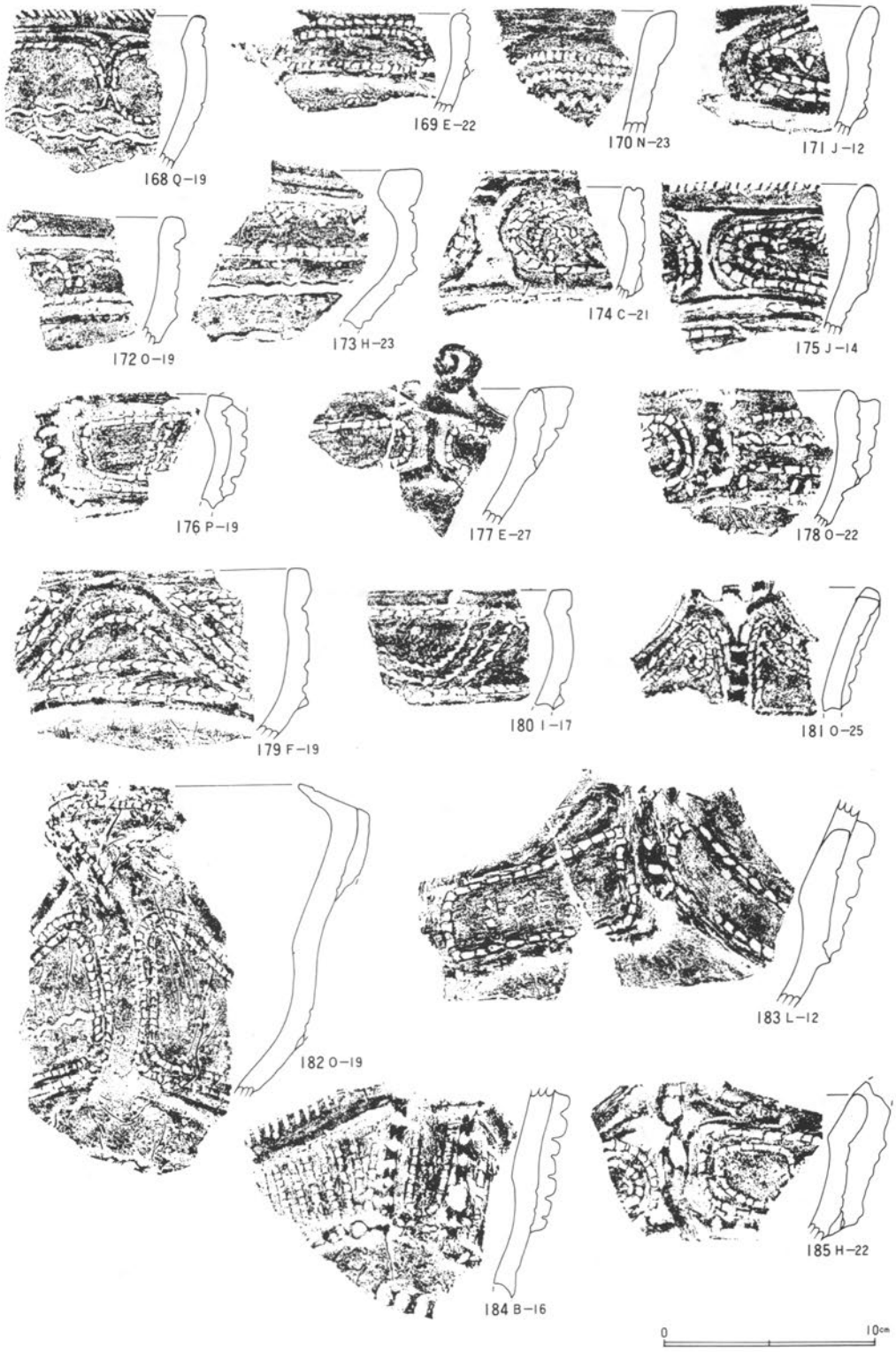
第13図　中山新田Ⅰ遺跡出土土器(90〜95・101〜104:第6群7類土器, 96〜100:第6群6類土器, 105〜117:第7群8類土器)



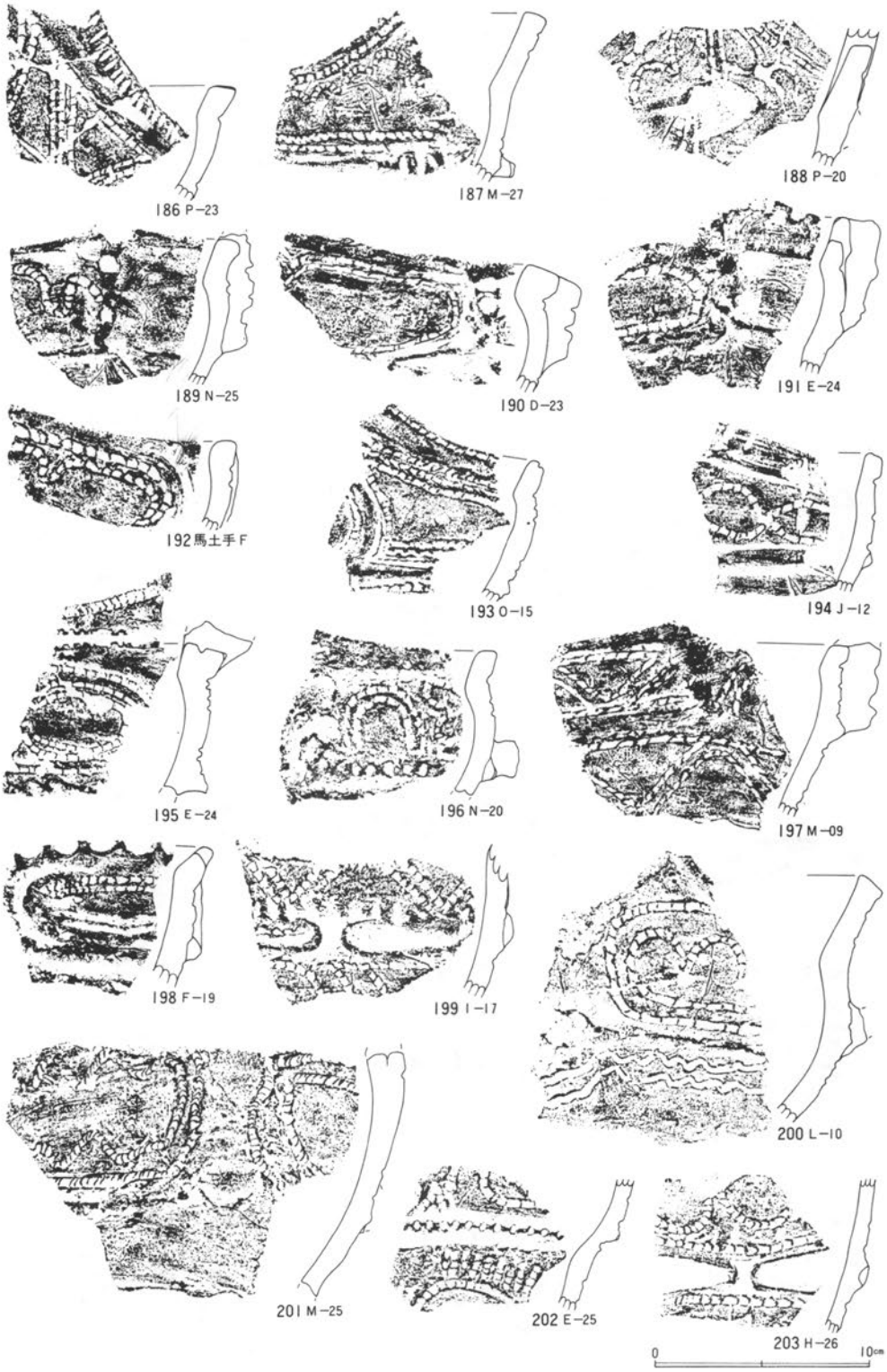
第14図　中山新田Ⅰ遺跡出土土器(118～122:第6群8類土器, 123～132:第7群2類土器, 133～142:第7群4類土器)



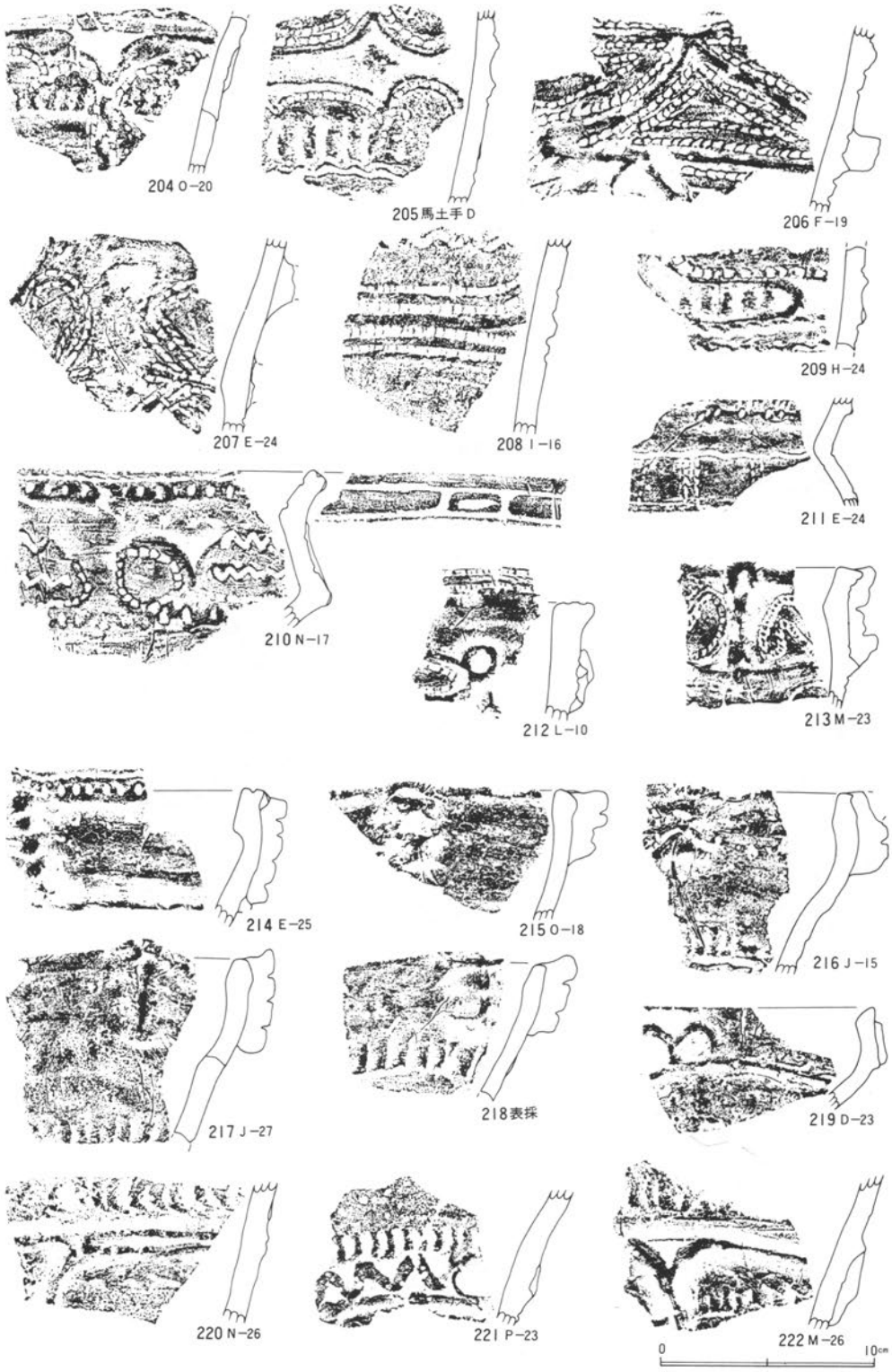
第15図　中山新田Ⅰ遺跡出土土器(143〜167：第7群4類土器)



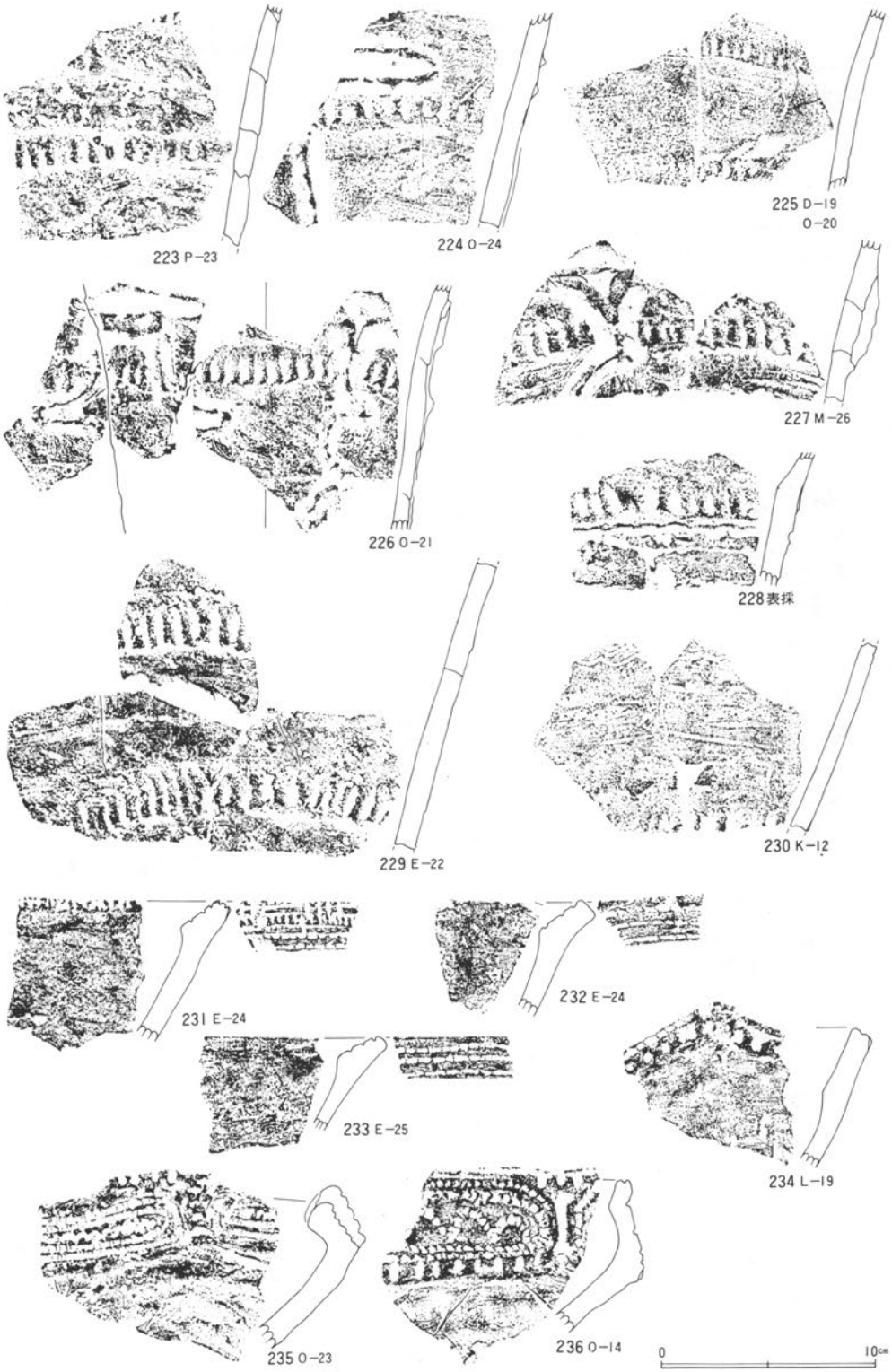
第16図　中山新田Ⅰ遺跡出土土器(168～180：第7群4類土器，181～185：第7群5類土器)



第17図　中山新田Ⅰ遺跡出土土器(186～203：第7群5類土器)



第18図　中山新田Ⅰ遺跡出土土器(204～213：第7群5類土器，214～222：第7群6類土器)



第19図　中山新田Ⅰ遺跡出土土器(223～230：第7群6類土器，231～236：第7群7類土器)

第20図　中山新田Ⅰ遺跡出土土器(237～241:第7群7類土器,242～254:第7群8類土器,土製品255:土偶)

並び、各一括資料毎に〈様相〉を示しながら変化を遂げて行くものと理解することができる。中山新田Ⅰ遺跡の第7群土器は、こうした意味において、阿玉台Ⅰb式土器の具体像を良く示したものなのである。

(前編註)

(1) 細い竹管状工具で施文された「結節沈線文」は，その文様効果の特色から「角押文」と呼称される事も多い（大村，1984)。しかし本稿では報告書記述との統一性を持たせるために「結節沈線文」と呼称した。なお，ペン先状工具による，いわゆる「三角押文」はこの限りではない。

(2) 隆帯に沿った「複列の」結節沈線文，という用語は（西村，1972）における阿玉台式土器の型式細別以降，主として阿玉台II式土器の文様要素の特徴としてしばしば用いられている。しかし，この複列の結節沈線文という記述は，阿玉台Ⅰb式土器に多く見られる，単一工具による結節沈線を2列に重ねて施した，装飾性の強い文様モチーフと、しばしば混同される危険がある。阿玉台II式土器に盛行する「複列の」結節沈線文は，竹管状工具の内面を土器に押し当てて引いた，いわば平行沈線による結節表現であり，阿玉台Ⅰb式のそれとは全く異なっている。この混同を避けるためにも，阿玉台II式土器のそれは，「結節表現のある平行沈線」とした方が好ましい。

(後編)

1．聖人塚遺跡と中山新田Ⅰ遺跡：出土土器の様相差

（前編）で、聖人塚遺跡・中山新田Ⅰ遺跡の遺構外出土資料を報告し、各遺跡における中期前半の土器の在り方を概観した。その結果、既に報告済の遺構出土資料の様相に加えて、これら両遺跡における中期前半期、特に阿玉台土器様式前半の土器群の変化を、近接した二遺跡を舞台に極めて相互補完的に追求できることが明らかになった。そこで、まず各細別型式毎の土器群から、下総台地北部の阿玉台式前半期の様相を考えてみたい。

(1) 五領ヶ台式終末～阿玉台Ⅰa式直前期

聖人塚遺跡のみから遺構に伴わない資料が出土している。この中で、五領ヶ台式土器からの系統上に位置づけられる第6群3類土器は、阿玉台Ⅰa式直前期に位置づけた第7群1類土器と具体的な時間差の存在を、その平面分布等から追うことはできない。しかし文様構成や胎土の相異等において、この両者は3類⟶1類への型式変化を明瞭に捉えることができ、またその変化の中にいわゆる様式としての阿玉台式土器成立の画期を認めることが可能となる。即ち、五領ヶ台式期に主文様の基調となった横位の沈線文が、7群1類土器に至って小突起のある口縁部を中心に、単列の曲線的な結節沈線文に置換され、それが次第に口縁文様帯としての楕円

形区画文として成長を始めるのである。この時点で、3類土器でしばしば見られた区画文内部の三角形陰刻文はほとんど姿を消し、その一方で曲線的な結節沈線文に付随した低平な貼付隆帯や、Y字状懸垂文が付加されるようになる。また、これらに伴って、単一工具による結節沈線文が多用される土器（聖人塚：92～95）も少量ではあるが存在する。これら土器の口縁部形態・器形は、東関東地方在地の五領ヶ台式土器終末期に共通するが、結節沈線文による胴部文様帯の表出は、西南関東地方の狢沢式併行の土器群につながるものである。

(2) 阿玉台Ⅰａ式期

聖人塚遺跡から遺構出土資料を含め、多くの土器が出土している。中山新田Ⅰ遺跡からも少数の出土が見られるが、量的に検討に耐えるものではない。

口縁部文様帯に、単列の結節沈線文による比較的簡素な文様が施され、多くは楕円形の区画状文となる。口縁部には叉状の小突起や、五領ヶ台式終末期から盛行する左右非対称の突起が付加されることが多い。聖人塚遺跡第7群2類土器が示す様相に照らせば、この段階では勝坂系列の土器群、具体的には狢沢式相当の非阿玉台系土器がほとんど伴出しない。阿玉台Ⅰａ式土器は、異系統土器を混じえること無く、その土器組成を充足させている点が特徴である。

(3) 阿玉台Ⅰｂ（古）・（新）式期

聖人塚・中山新田Ⅰ両遺跡から、多くの資料を呈示することができた。阿玉台Ⅰｂ式土器は、それに伴出する勝坂系列の土器、狢沢式の型式変遷に対置して、古・新に細別されている。しかし阿玉台Ⅰｂ式自体の型式変化の様相における、この二者の細別基準は、先述の通り未だ明確ではなく、近年の諸報文でも阿玉台Ⅰｂ式（古）・（新）の細分は、あまり試みられていない。一般的な理解では、この古・新両段階とも、扇状把手が発達し、またその空間的分布が東北南部から中部・東海地方にまで拡大する土器として扱われ、多くの地域差がそのまま土器型式の理解を難かしくしている感が強い。型式細別の根拠の多くを、伴出する異系統土器の様相に負うことも、これに一層の拍車をかけている。しかし今回報告した第7群4類・5類土器に見られる2遺跡出土資料の様相差は、この阿玉台Ⅰｂ式（古）・（新）2細別に、比較的具体的な指標を与えてくれた。つまり第7群4類土器は、聖人塚・中山新田Ⅰ両遺跡からまとまって出土し、平縁の深鉢形土器をその型式組成の主体とする一群で扇状把手も未発達、大きくのびあがる把手は含まない。しかも、5類土器をほとんど出土しない聖人塚遺跡では、異系統土器である第6群土器も伴わない。一方、第7群5類土器とした、大形の波状口縁や、発達した大形の扇状把手が特徴的な土器は、中山新田Ⅰ遺跡から主体的に出土し、こちらの方には比較的多くの第6群土器、狢沢式土器相当の異系統土器が存在しているのである。つまり、このことから、阿玉台Ⅰｂ式土器の2細分は、平縁の深鉢形土器を基調として、未発達な扇状把手が加飾される一群と、大形の扇状把手が発達し、大きな波状口縁を持つ深鉢形土器が主体を占める一群を、

それぞれ（古）・（新）として位置づけることが可能なのである。これまで阿玉台Ｉｂ式土器の型式表徴として一般に理解されていた、扇状把手の本格的な発達は、即ち阿玉台Ｉｂ（新）式土器以降に求められる特徴と言うべきであろう。そしてこの段階以降、下総台地北部の諸遺跡では、非阿玉台系土器が再び伴出するようになる。

(4) 阿玉台II式期

この段階になると、聖人塚遺跡からはほとんど資料の出土が見られず、僅かに中山新田Ｉ遺跡出土土器が存在するのみである。第７群８類土器としてまとめた結節のある平行沈線文（＝複列の結節沈線文）が文様要素の主体となり、貼付隆帯はそれ以前の断面三角形、比較的低平なものから、断面半円（カマボコ）形、比較的肉厚なものへと変化する。この段階には、ペン先状工具による三角押文が特徴的な新道式併行の非阿玉台系土器＝第６群７類土器が伴う。聖人塚・中山新田Ｉ両遺跡を通じて、阿玉台式期の最も新しい一群である。

以上、阿玉台土器様式前半期の様相を、２遺跡の資料を比較する形で概観した。この中で、阿玉台Ｉａ式～Ｉｂ（古）式期における非阿玉台系土器の欠如＝土器組成としての安定性と、阿玉台Ｉｂ式（古）・（新）２細分に関する所見は、下総台地北部の該期土器群の在り方についての一つの指標となるものである。

２．異系統土器の問題

阿玉台式土器前半期における、出土土器の様相が明らかになったところで、次にそれらに混在する非阿玉台系土器＝異系統土器について問題点を探ってみよう。ここで取り上げる異系統の土器には、五領ヶ台式から狢沢・新道式へと続く、いわゆる勝坂系の土器と、阿玉台式、勝坂式両系列のどちらにも属さない、いわゆる「鳴神山系」の土器がある。

(1) 勝坂系の土器

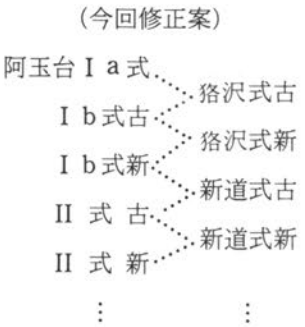
阿玉台式土器各段階における勝坂系土器との型式対応については、多くの研究者の着目するところであり、最近も谷井彪氏による整理が行われた（谷井、1986）。それに依れば、阿玉台Ｉａ式＝狢沢式（古）、阿玉台Ｉｂ式（古）＝狢沢式（新）、阿玉台Ｉｂ式（新）＝新道式（古）、阿玉台II式（古）＝新道式（新）、阿玉台II式（新）＝藤内式……という段階的な対応が明らかにされている。聖人塚・中山新田Ｉ遺跡における、勝坂系土器の在り方も、その大方でこの見解を支持するものであった。しかし、より細かく見ると、狢沢式（古）に対応する阿玉台Ｉａ式段階では、全く非阿玉台系の土器を出土しないにも拘らず、次の阿玉台Ｉｂ（新）段階以降の土器が多く出土する中山新田Ｉ遺跡では、単一工具による結節沈線文が特徴的な狢沢式（古）土

器＝第６群５類土器が伴出する。狢沢式土器の型式変遷については、多摩丘陵や中部地方諸遺跡の様相から、その（古）段階において単一工具による結節沈線文のみが多用され、（新）段階に至って幅広・幅狭複数種類の結節沈線文、或いはキャタピラ文が併用されるようになることが知られている。具体的には、町田市藤の台遺跡３・４号住居跡出土土器（川口他、1981）、八王子市神谷原遺跡ＳＢ148、155、178住居跡出土土器（新藤・中西他、1982）が狢沢式（古）の、町田市清水台遺跡６号住居跡出土土器（浅川・戸田、1971）、町田市木曽中学校１号住居跡（川口他、1983）、八王子市神谷原遺跡ＳＢ147・150・151住居跡出土土器（新藤・中西他、1982）が、狢沢式（新）の良好な一括資料として挙げられる。(註１) しかし、これら多摩丘陵の諸遺跡で伴出する阿玉台式土器は、狢沢式（新）段階においても、既に阿玉台Ｉｂ（新）式土器であることが多く、阿玉台Ｉｂ（古）式と併行関係を求められた谷井氏の見解とは矛盾点が生じてしまう（木曽中学校１号住等）。これを翻って中山新田Ｉ遺跡にあてはめた場合、第６群５類土器＝狢沢式（古）、第６群６類土器＝狢沢式（新）土器は、各々、前者が阿玉台Ｉａ式からＩｂ（古）式に、後者が阿玉台Ｉｂ（古）式からＩｂ（新）式の一部とも併行する可能性を示している。つまり、阿玉台式土器前半期に対応する、勝坂系列の土器、狢沢式土器は、谷井氏の示した対応関係より、若干時期的に新しい方向へずれが生じているのである。この土器型式対応のずれは、次の第６群７類土器＝新道（古）式土器において登場する、ペン先状工具による三角押文という文様要素が、阿玉台Ｉｂ（新）式土器の文様要素中には、未だほとんど定着していない点からも追証することが可能なようである。以上のように考えると、阿玉台式土器と狢沢・新道式土器を含む勝坂系土器との型式対応関係は、特にその前半期に限ってみれば、次のように修正される公算が強い。

（谷井、1986）

阿玉台Ｉａ式……狢沢式古
Ｉｂ式古……狢沢式新
Ｉｂ式新……新道式古
II 式 古……新道式新
II 式 新……藤 内 式
⋮　　⋮

（今回修正案）



(2) いわゆる「鳴神山系」の土器

阿玉台式土器に伴出する異系統の土器群として、もう一つ注意しなければならないのは「鳴神山系」土器の問題である。「鳴神山系」の土器は、胴部における文様帯の縦割区画と、無文部を極力残さないで文様を充塡する手法、及び〝捻り餅状〟の肉厚な貼付隆帯・懸垂文が特徴的な土器群であり、当初（高橋、1959）で、阿玉台Ｉｂ（新）式期の土器と共に出土した、市川

市鳴神山貝塚出土の資料から提唱されたものである。この時の報文では、「その文様構成において、五領(ママ)台式に似た相をあらわし、また文様の一部に勝坂式的な要素を備え、またさらに結節沈線の盛行という点から阿玉台式との関連を考えさせる。したがって、その型式上の所属をにわかに決定することが困難」な土器とされ、それが勝坂系列・阿玉台系列のいわば折衷型的な土器群である可能性に言及している。その後、この種の土器は関東西南部から諏訪地方以東の中部地方まで、しばしば狢沢式前後の土器群に伴出することが明らかになり、その系列・分布が意外に複雑であることに注意されてきた。しかし、もとより五領ヶ台式から狢沢・新道式に続く、勝坂系列の土器群では、「鳴神山系」土器に見られるような胴部文様帯の縦割区画文・肉厚な貼付隆帯による懸垂文はその型式内部に自生せず、またその一方で、やや口縁が広がる単純な円筒形の器形をとる深鉢も、阿玉台系列の土器群中に積極的に見出すことができない。やはり土器型式の系統上からは、両者とは一線を画す、独自な系統の土器と考えた方が妥当なようである。(註2) しかし、阿玉台系・勝坂系の両土器様式が、各々ほとんど他系列の土器を含まないでその土器組成を充足させる分布上の「核地域」を持ち、常に隣り合った土器様式である両者の伴出を主体・客体の関係で論じることができるのに対し、「鳴神山系」土器には未だ明確な分布上の「核地域」が設定されていない。文様要素自体も様式としての独自性を欠くことから、最近では、しばしば勝坂系列の土器群中の一組列として包括されてしまうことも多い。(註3)

こうした状況下にあって、中山新田Ⅰ遺跡では、第6群3・4類土器の一部に属する（中山新田：28～30・34・39）や、096住居跡出土の3（第23図）、090住居跡出土の7（第24図）、遺構外出土の3（第24図）を「鳴神山系」の土器として摘出することができる。これらの土器の編年的位置づけは、文様施文具の特徴に着目すれば、単一工具による結節沈線文が多用される（中山新田：28～30・34、第24図3）を阿玉台Ⅰb（古）式期に、またキャタピラ文が併用された住居跡出土の2個体を阿玉台Ⅰb（新）式期に併行させることができそうである。しかも〝捻り餅状〟の貼付隆帯は、次の第6群7類土器＝新道式土器に通有な口縁部隆帯の表出方法にも類似する。これらを勘案すると「鳴神山系」土器は、阿玉台Ⅰb（古）式期以降に生成する、胴部文様帯の縦割区画文と、無文部を嫌う過多な装飾性を特徴とした独自な系統の土器群であるにも拘らず、器形・文様要素の面で確固たる型式表象の自立性を獲得できなかった故に、阿玉台Ⅱ式期以降、再び勝坂系列の新道式土器に同化・吸収されていったものと考えることも可能ではあるまいか。それ故に、もとより分布上の「核地域」も闡明されず、徒らに広い資料分布が注目されるのかも知れない。下総地域のみならず、多摩丘陵から中部地方の東半にまで及ぶ散在的な分布も、新道式土器成立の一要素として「鳴神山系」土器が機能したと考えれば、至極妥当なものである。ただし、冒頭で述べた通り、「鳴神山系」土器の土器系列としての独自性は、その出自、分布論、更により細かな型式変遷の実際を明らかにする必要がある。現段階

では、あくまでも「鳴神山系」の土器が、非阿玉台系、非勝坂系の独自な型式を持つ土器群であることを再認識するに留めたい。

3．出土土器の様相から見た聖人塚・中山新田Ⅰ遺跡の集落変遷

出土土器に関する検討を終えたところで、再度聖人塚・中山新田Ⅰ両遺跡の集落変遷について、報告書で既に呈示した遺構出土土器から住居跡群の変遷を段階順に追ってみよう。

(1) 聖人塚・中山新田Ⅰ集落Ⅰ期：阿玉台Ⅰａ式期

谷津の最奥部に面した聖人塚遺跡の一角に、埋甕土坑１基が構築され、その周囲から散在的に遺物が出土する。埋甕に使用された土器は低隆帯に結節沈線が加飾され、それが胴部のクランク文を構成するより古手の様相を持った深鉢である。これに若干遅れて、竪穴状遺構４基が築かれた。そのうち161・162竪穴からは、口縁部に叉状の突起や左右非対称の小突起など、阿玉台Ⅰａ式の文様要素を示す土器がまとまって出土している(第21図)。報告書段階では、これら竪穴状遺構の時期を、阿玉台Ⅰｂ（古）式期と、一段階新しく考えていたが、出土土器の様相は、151埋甕土壙の深鉢には後続するものの、阿玉台Ⅰａ式土器の範疇で捉えるべきものであるので、ここに訂正する。

従って、この「集落Ⅰ期」は、阿玉台Ⅰａ式に属する小集落として、東関東地方では初見のものとなった。

(2) 聖人塚・中山新田Ⅰ集落II期：阿玉台Ⅰｂ（古）式期

聖人塚遺跡では既に遺構の構築を窺えず、土器のみが稀薄ながら分布するだけになる。その一方で、東方に300mほど離れた中山新田Ⅰ遺跡に、住居跡・竪穴状遺構７基が構築され、集落の移動が認められる。中山新田Ⅰ遺跡では、平縁の深鉢に花弁状の把手や、比較的小型の扇状把手を加飾する土器が主体的に出土する081・091・097住居跡が、明確な該期の遺構として位置づけられ（第22・23図)、遺物出土に乏しいながら、大旨同時期に位置づけられる他の４基の住居跡・竪穴とともに、浅い凹地をとりまく直径100メートル前後の環状集落が構成される（第１図)。最も安定した集落配置が認められる時期である。

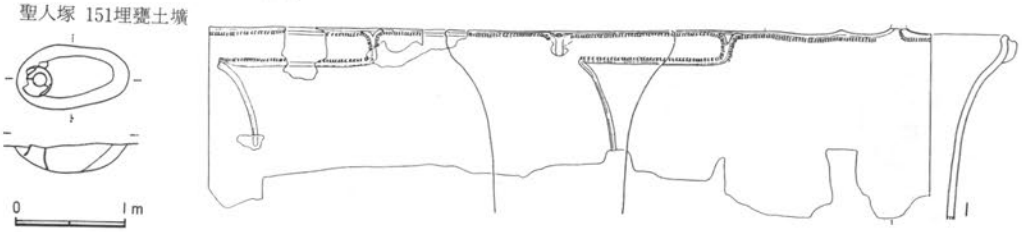
(3) 聖人塚・中山新田Ⅰ集落III期：阿玉台Ⅰｂ（新）式期

聖人塚遺跡では、既にほとんどこの段階の遺物を出土しない。僅かに中山新田Ⅰ遺跡で096住居跡１基のみが構築される。この住居跡は、いわゆる有段式竪穴で、出土土器には非阿玉台系の土器も含み、４単位の大形な扇状把手が発達する深鉢が主体となる（第24図)。

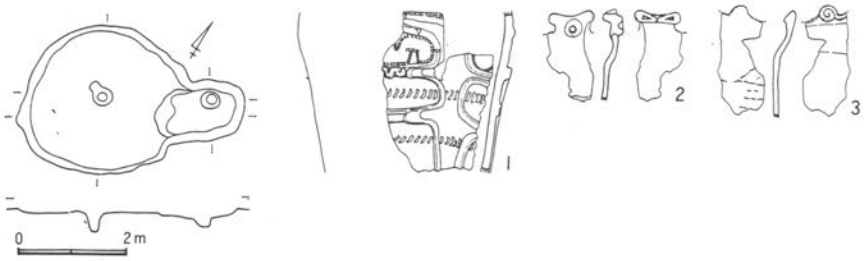
この段階になると、今度は谷を隔てた北側の台地上に新しく**中山新田II遺跡**が出現し、ここでは土坑１基（067土坑：田中他、1983）が検出されている。更に北東500mに所在する**水砂遺**

集落Ⅰ期＝阿玉台Ⅰａ式期

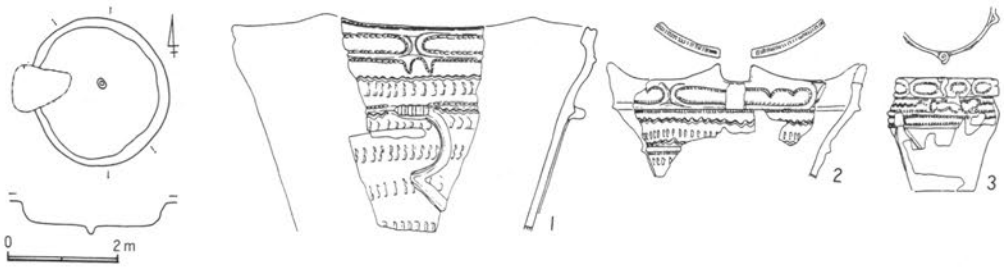
聖人塚 151埋甕土壙



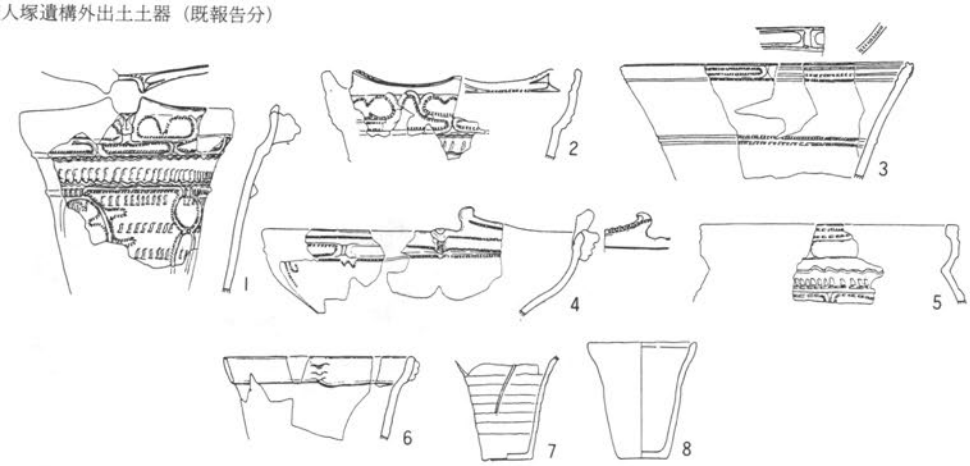
聖人塚 161竪穴状遺構



聖人塚 162竪穴状遺構



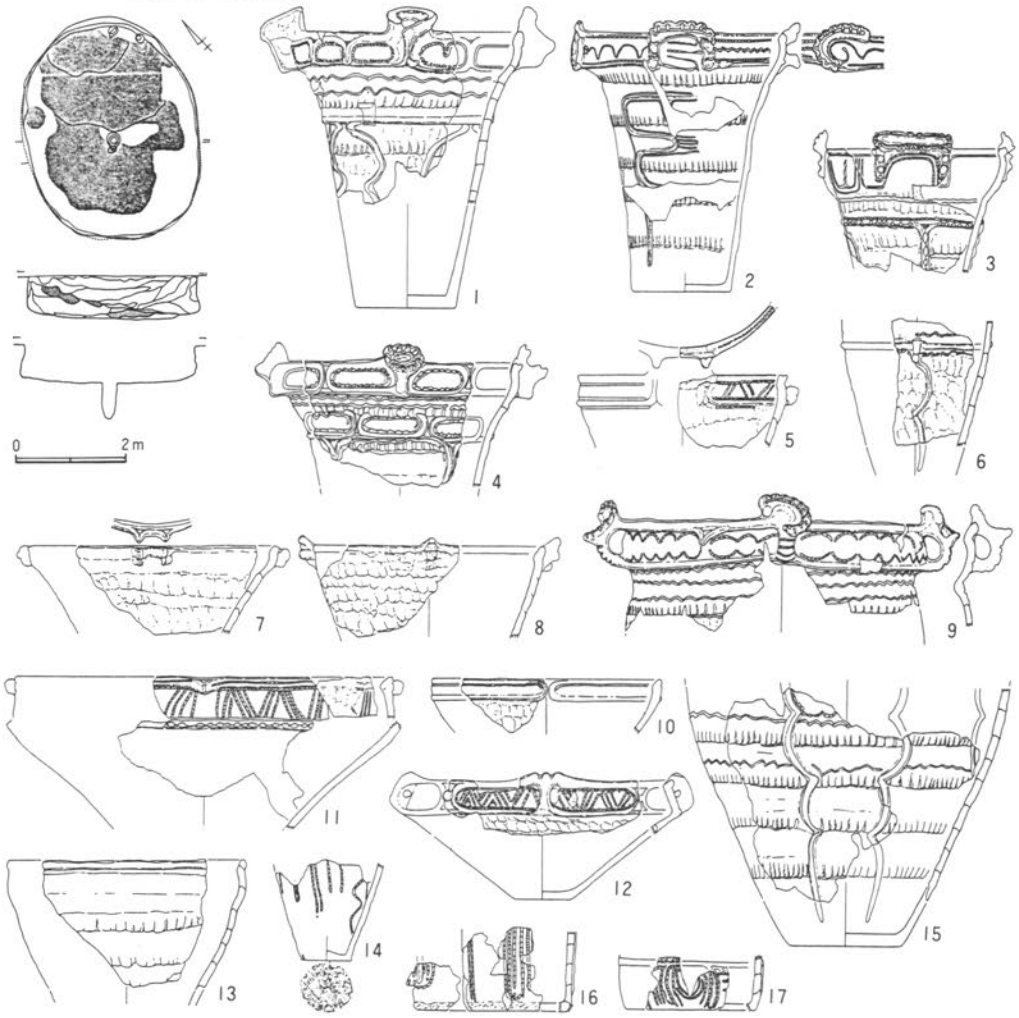
聖人塚遺構外出土土器（既報告分）



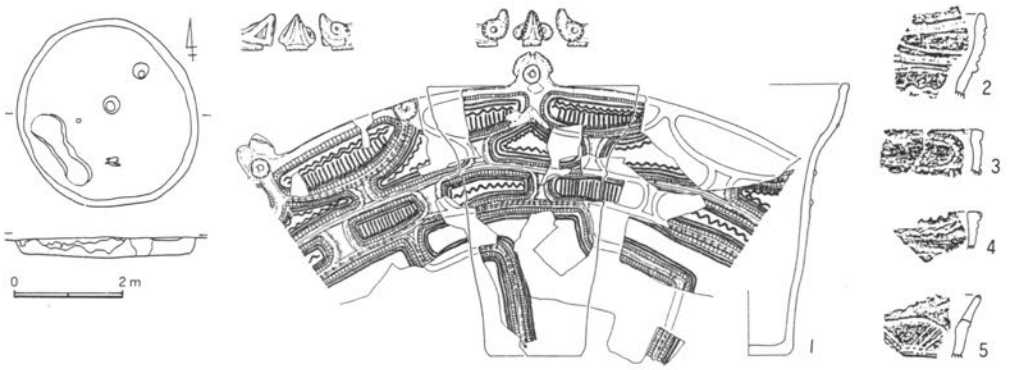
第21図　聖人塚遺跡：集落Ⅰ期出土土器

集落II期＝阿玉台Ｉｂ(古)式期

中山新田Ｉ　081住居跡



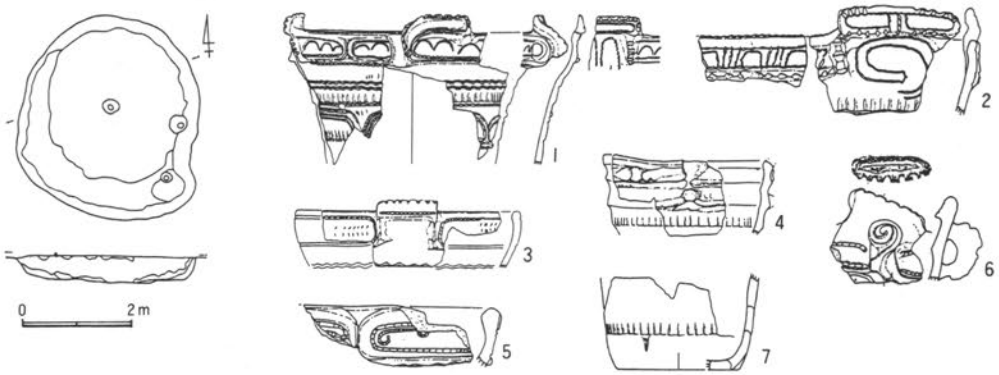
中山新田Ｉ　090住居跡



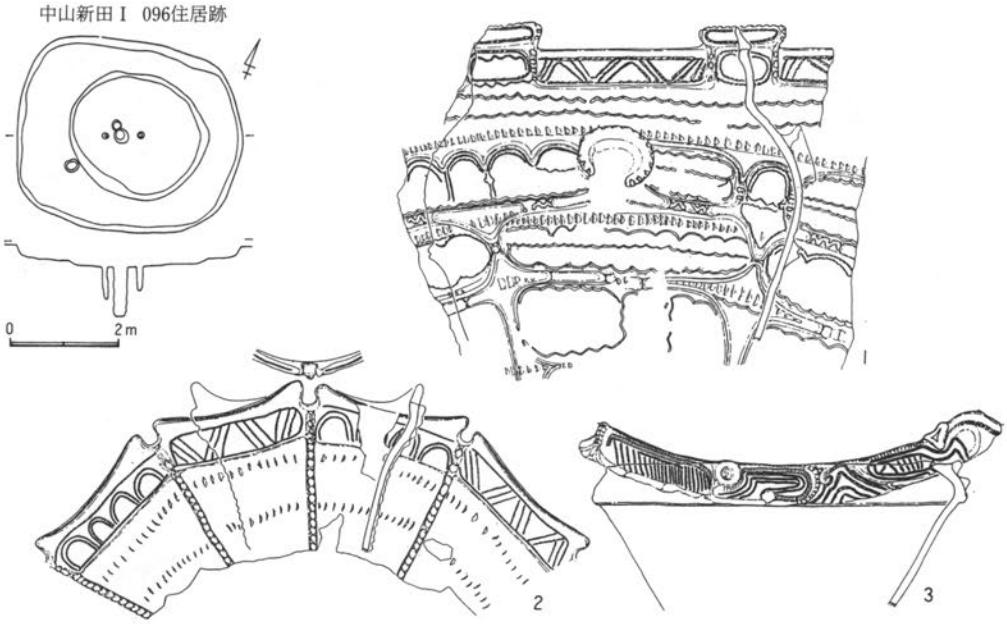
第22図　中山新田Ｉ遺跡：集落II期出土土器

集落II期＝阿玉台Ｉｂ(古)式期

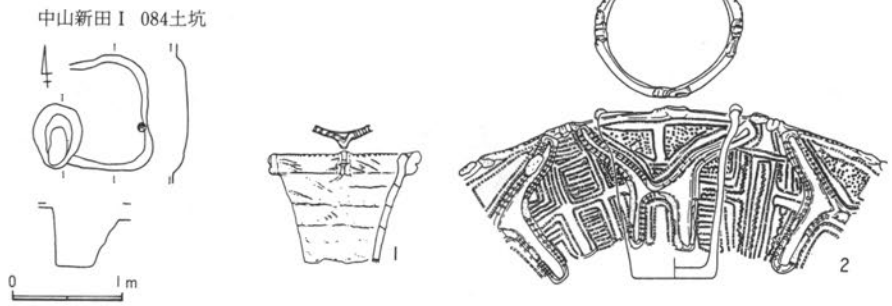
中山新田Ｉ 091住居跡



中山新田Ｉ 096住居跡



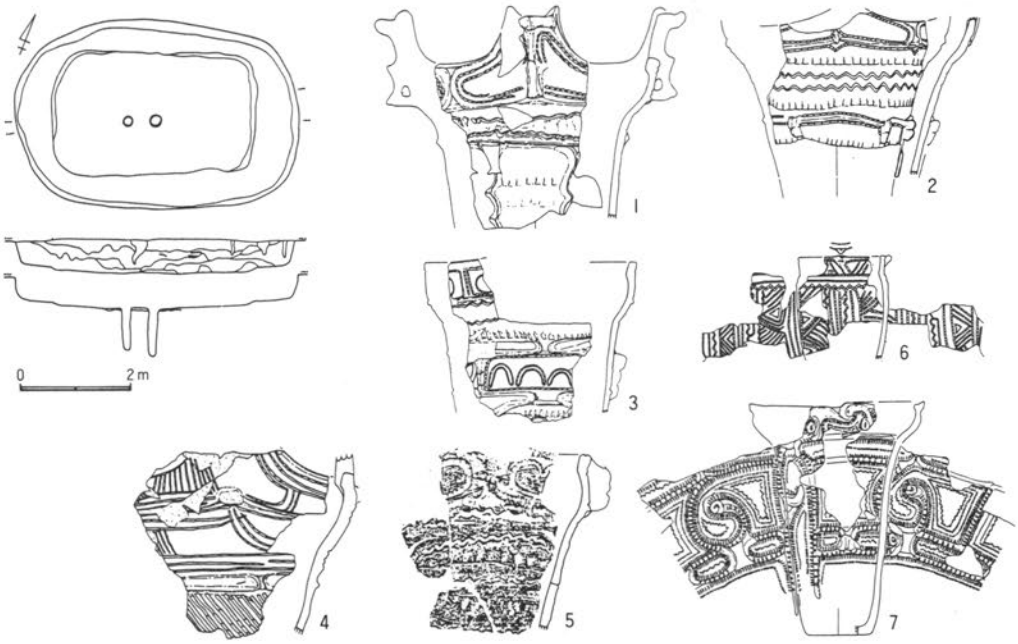
中山新田Ｉ 084土坑



第23図　中山新田Ｉ遺跡：集落II期出土土器

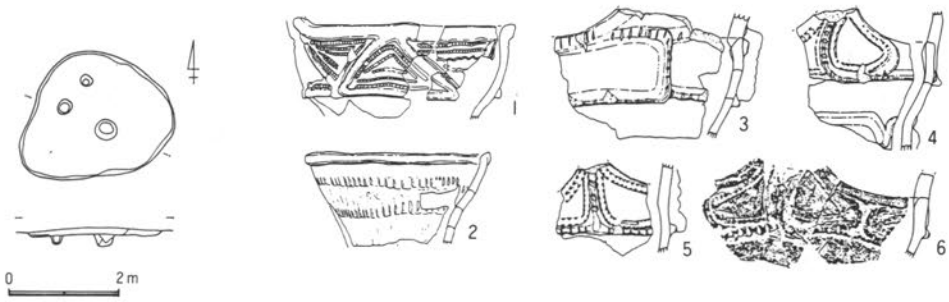
集落Ⅲ期＝阿玉台Ⅰb(新)式期

中山新田Ⅰ 096住居跡

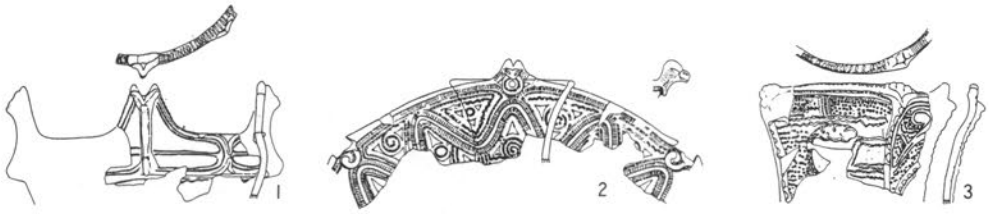


集落Ⅳ期＝阿玉台Ⅱ式期

中山新田 087住居跡



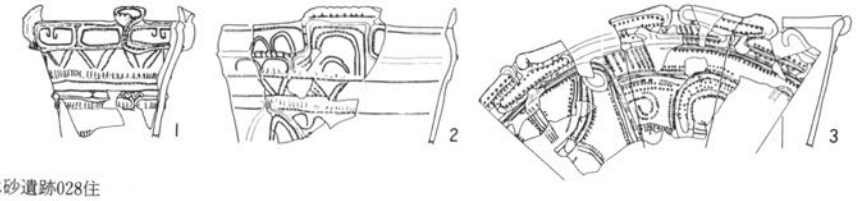
中山新田Ⅰ 遺構外出土土器(既報告分)



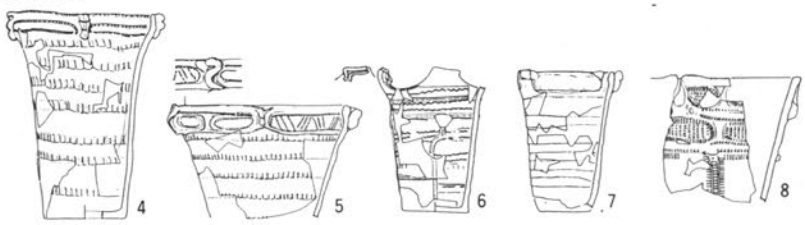
第24図　中山新田Ⅰ遺跡：集落Ⅲ・Ⅳ期出土土器

阿玉台Ⅰb(新)式期

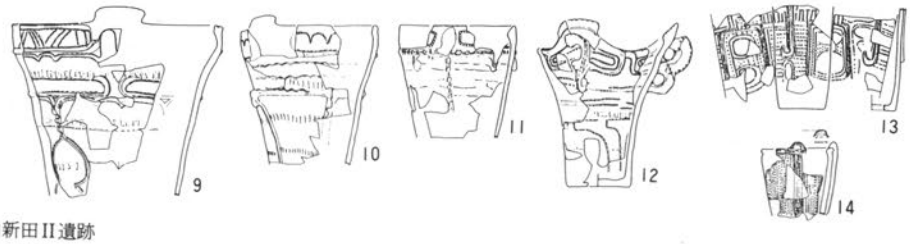
水砂遺跡027住



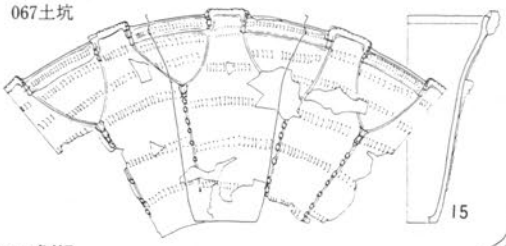
水砂遺跡028住



水砂遺跡029住

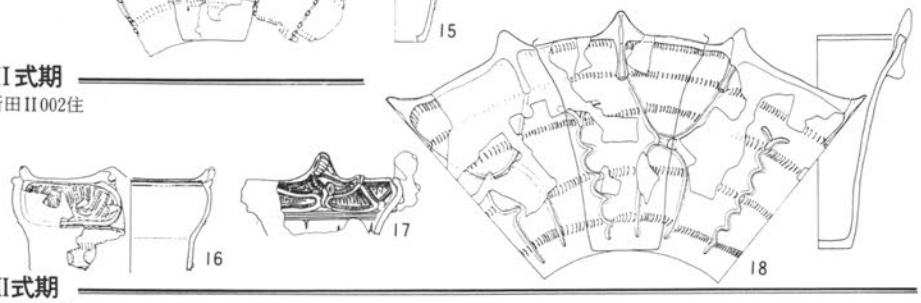


中山新田Ⅱ遺跡
067土坑



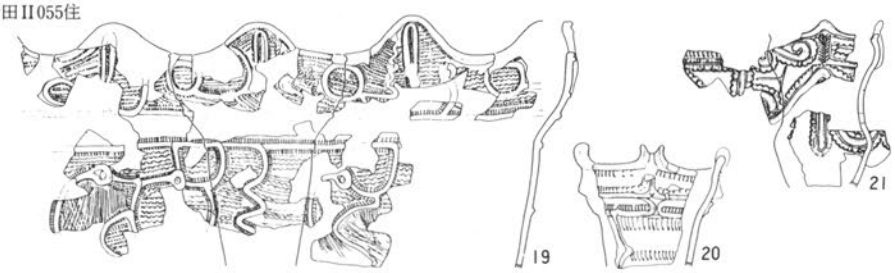
阿玉台Ⅱ式期

中山新田Ⅱ002住



阿玉台Ⅲ式期

中山新田Ⅱ055住



第25図　周辺遺跡の阿玉台Ⅰb～Ⅲ式期遺構出土一括資料

跡ではそれらより若干先行する時期から住居跡３基（027・028・029住：田中他、1982）が営まれるようになり、波状口縁の発達した阿玉台Ｉｂ（新）式土器に混じって、Ｉｂ（古）式土器も出土している(第25図)。周辺の遺跡調査が未了な今、断定することは不可能であるが、阿玉台Ｉｂ（古）式期に、まず中山新田Ｉ遺跡において、環状に遺構群を配する〈集約型〉の集落が出現し、それは短期間の後に、周辺各台地へ分散して〈散在型〉の小規模集落へと変遷して行ったものと考えることもできる。

(4) 聖人塚・中山新田Ｉ集落Ⅳ期：阿玉台Ⅱ式期

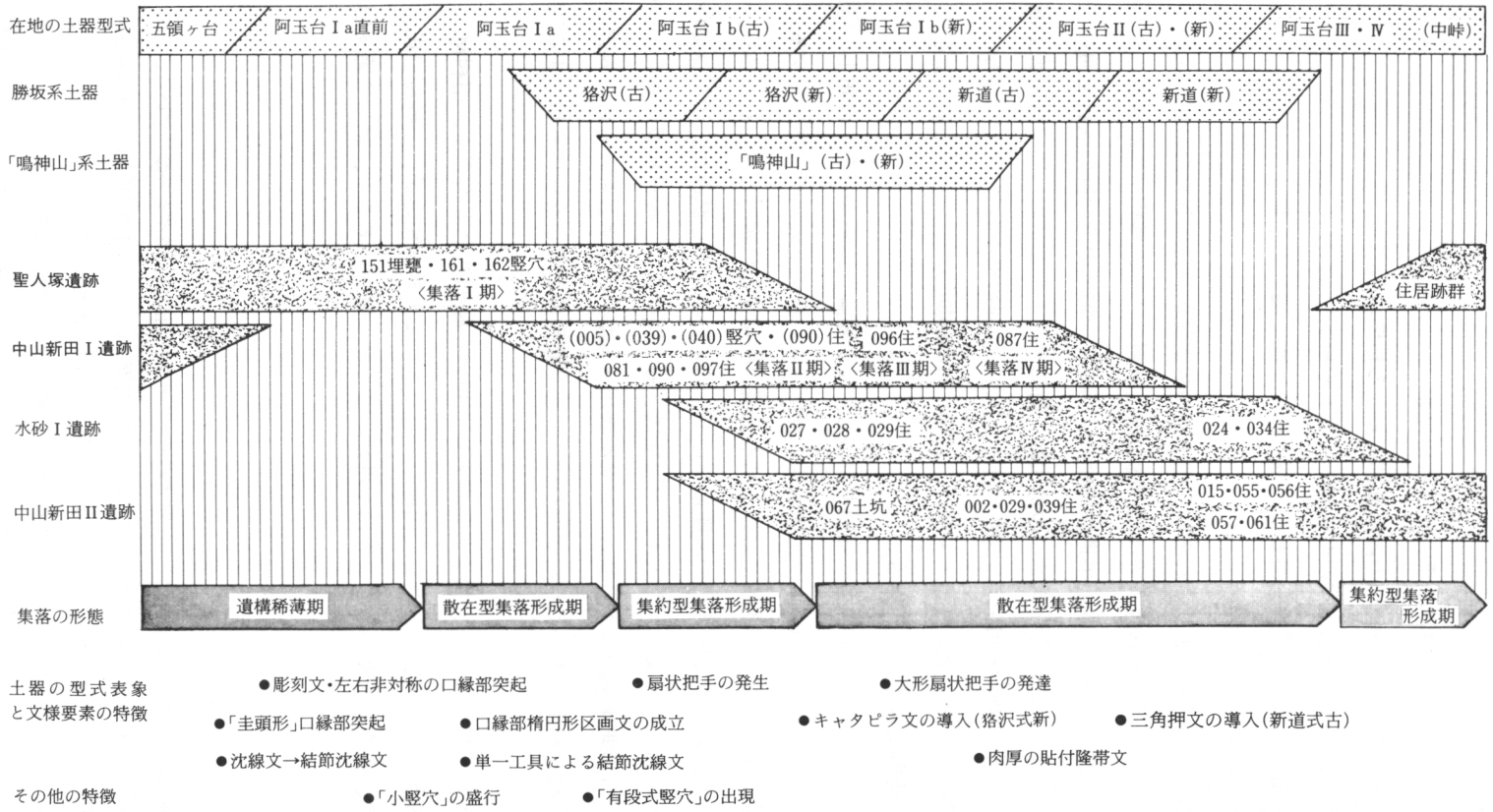
中山新田Ｉ遺跡に087住居跡一基のみが存在する。同住居跡からは、結節ある平行沈線文(複列の結節沈線文）と、肉厚の貼付隆帯を持つ深鉢形土器が主体的に出土する（第24図）が、遺構外における遺物の分布は周辺の狭い範囲に限られる。最早、集落としての形態を示さない段階である。周辺地域では、谷津の対岸、中山新田Ⅱ遺跡で住居跡１基（002住：田中他、1983）が検出されているが、あまりまとまった遺構は呈示されていない（第25図)。

中山新田Ｉ遺跡における阿玉台式前半期集落の〝終焉期〟として位置づけられる時期である。

以上、聖人塚・中山新田両遺跡の、阿玉台式前半期における集落の消長を、出土土器の様相から跡づけた。阿玉台Ⅲ式期以降、聖人塚・中山新田Ｉ遺跡ではほとんど出土資料を欠く一時期を隔てて、今度は勝坂式末葉期からいわゆる中峠式期に、聖人塚遺跡で大規模な〈集約型〉の集落が出現する。この間、阿玉台Ⅲ式期の集落は、いずれも散在型ながら水砂遺跡と中山新田Ⅱ遺跡で同時に営まれ、これら諸遺跡を含めて、連続した縄文時代中期の集落変遷が辿れるようになっている。今後、周辺地区での調査例が増加すれば、この地域における遺跡群の様相は、より具体的に解明されて行くことであろう。最後に、常磐道柏地区における阿玉台式前半期の遺跡動態を（第26図）としてまとめてみた。

4．収　　束

以上、聖人塚・中山新田Ｉ遺跡出土資料の追加報告を期に、下総台地北部における縄文時代中期、阿玉台式土器前半期の諸問題を概観した。もとより本稿は、整理作業の時間的制約から、その内容が不十分であった『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書』Ⅳの補遺・総括編である。またそうした性格上、出土資料の事実記載にその大半が割かれていると共に、(後編)で扱った課題にも、多岐に亘るテーマを与えざるを得なかった。従って内容的には一貫性を欠く結果となり、それについての大方の謗りはまぬがれない。(註４) しかし両遺跡出土資料の分析を通じ、該期の土器群のあり方について、幾つかの新知見を加えることができたことは、一応の成果として



土器の型式表象と文様要素の特徴

- ●彫刻文・左右非対称の口縁部突起
- ●扇状把手の発生
- ●大形扇状把手の発達
- ●「圭頭形」口縁部突起
- ●口縁部楕円形区画文の成立
- ●キャタピラ文の導入(狢沢式新)
- ●三角押文の導入(新道式古)
- ●沈線文→結節沈線文
- ●単一工具による結節沈線文
- ●肉厚の貼付隆帯文

その他の特徴

- ●「小竪穴」の盛行
- ●「有段式竪穴」の出現

※遺構番号に（　）があるものは、出土土器が少なく、時期比定が明確ではないもの

第26図　常磐道柏地区遺跡群に見る阿玉台式(主に前半期)の遺跡動態時出土土器の様相

良いであろう。これらの知見は――

① 阿玉台Ⅰａ式期における、異系統土器の欠如

② 阿玉台Ⅰｂ式（古）・（新）の段階細別における指標の摘出

③ 阿玉台式土器と勝坂系土器の型式対応に関する新知見

④ 「鳴神山系」土器の型式変遷とその型式的自立性に関する予察

⑤ 阿玉台Ⅰａ式期の集落跡の呈示

として要約される。もとよりこれらは、柏市内の数遺跡から抽出された、極めて限られた調査所見に依っている。しかし今までは個別的な出土資料からその様相が推測されることの多かった、下総台地北部の阿玉台式前半期の様相に、初めて一地域の遺跡群の検討を通してアプローチすることができた。阿玉台式土器の様相は、特にその前半期において、異系統土器との伴出関係等で、極めて微妙な地域性が反映される。これは、利根川を隔てて数キロ離れただけの、茨城県谷和原村大谷津Ａ遺跡（鈴木・高村、1985）の同時期の集落跡出土資料と比較しただけでも、容易に理解できる事実である。(註5)

阿玉台式土器の研究は、その型式細別を中核とした土器論、遠隔地分布と分布上の「核地域」を検討対象とした分布論に関する一定の成果が提出され、(註6) 現在そのテーマは隣接する他の土器様式との相互関係の把握、各地域における出土土器の様相差の分析へと進化している。本稿では、下総台地北部における、如上の課題について、若干のまとめを試みた。しかし資料的な制約から触れることのできなかった大木系土器様式との問題を含め、後日に委ねられた課題は山積している。浅学非才を顧みず、徒らに駄文を連ねた事をお詫びするとともに、内容において誤認・曲解を犯した点が多々あるかと思われる。先学諸氏のご叱正を切にお願いする次第である。

本稿をまとめるにあたって、筆者の半年という短い在職期間にも拘らず、田村隆氏には、資料整理の段階から、全般にわたるご指導をいただき、また新井和之氏、山崎和巳氏、上守秀明氏をはじめ、多くの方々からのご教示を得た。ここに末筆ではあるが、記して感謝申し上げたい。

（後編註）

(1) 八王子市神谷原遺跡では，阿玉台式土器の型式細分を指標に住居跡群の時期を分類している。これに本稿における知見を加えて再検討すれば，報告書による「神谷原Ⅱ期」は，阿玉台Ⅰａ期併行のＳＢ160住が分離できる以外に，阿玉台Ⅰｂ式併行期も，（古）・（新）に２細別することが可能となる。

(2) この意味で，小林謙一氏による「組列」の概念から「鳴神山系」土器を認識した論考は注目される（小林，1984）。氏は，阿玉台系の土器：Ａ群，勝坂系の土器：Ｂ群を基軸に，両系統の中間的な型式表象を持つ土器：

C群と，縦割区画文が特徴的な土器：D群，更にその他の土器：E群を設定し，各群の文様要素・器形の補完関係から，地域毎の段階細別を試みられている。この中で，本稿で言う「鳴神山系」土器は，D群として，一つの土器組列として位置づけられた。

(3) 下総考古学研究会による「勝坂式土器の研究」（下総考古学研究会，1985）でも，「鳴神山系」土器は勝坂式土器Ⅰ期の中に包括され、縦割文様区画等，この土器群に特異な型式表象についての評価はほとんど行われていない。

(4) 大規模調査に伴う資料報告には，種々の問題点がある。そして時には報告書刊行で、十分な資料の呈示すら不可能な場合が少なくない。こうした場合、本稿のような形で，変則的に資料報告を補遺報告することも止むを得ない方策であろう。こうした報告書刊行に関しての筆者の立場は（原田，1986）で明示したことがある。

(5) 谷和原村大谷津A遺跡からは，阿玉台Ⅰb式期：9軒，阿玉台Ⅰb～Ⅱ式期：9軒，阿玉台Ⅱ式期：10軒の住居跡が調査され、それに伴って多量の遺物が出土・報告されている。しかしこれら出土資料の中には，勝坂系はもとより「鳴神山系」等の非阿玉台系土器もほとんど含まれていない。利根川（旧：鬼怒川）を隔てて，柏地区の遺跡群とは僅か数キロしか離れていない地域でも，その出土資料が示す様相差には，大きなものがある。

(6) 阿玉台式土器の分布論的な考察は，主にその前半期を対象とした（川口，1981）や（池田，1982）等がある。

引用参考文献（五十音順）

ア 浅川利一・戸田哲也 1971 「町田市玉川学園清水台遺跡緊急発掘調査略報」『文化財の保護』3 東京都教育委員会

池田晃一 1982 「阿玉台式土器の分布とその問題点」『史学研究集録』7 国学院大学日本史学専攻大学院会

今村啓爾 1985 「五領ヶ台式土器の編年―その細分および東北地方との関係を中心に―」『東京大学文学部考古学研究室紀要』4 東京大学文学部考古学研究室

大村 裕 1984 「所謂「角押文」と「キャタピラー文」の違いについて」『下総考古学』7 下総考古学研究会

カ 川口正幸他 1981 『藤の台遺跡』Ⅲ 藤の台遺跡調査会

川口正幸他 1983 『町田市木曽中学校遺跡』 町田市教育委員会

小林謙一 1984 「中部・関東地方における勝坂・阿玉台式土器成立期の様相」『神奈川考古』19 神奈川考古同人会

サ 佐藤達夫 1984 「土器型式の実態―五領ヶ台式と勝坂式の間―」『日本考古学の現状と課題』吉川弘文館

佐藤達夫 1976 「勝坂式成立の問題点」『北奥古代文化』8 北奥古代文化研究会

下総考古学研究会 1985 「特集・勝坂式土器の研究 各時期の特徴とその変遷」『下総考古学』8

新藤康夫・中西充他 1982 『神谷原』八王子市椚田遺跡調査会

タ 高橋良治 1959 「千葉県・鳴神山貝塚の土器」『考古学手帖』10

高村 勇・鈴木美治 1985 「大谷津A遺跡」『水海道都市計画事業・小絹土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書』3 茨城県教育財団

田中 豪他 1982 「水砂遺跡」『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書』Ⅰ 千葉県文化財センター

田中　豪他　1983　「中山新田II遺跡」『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書』II　千葉県文化財センター

谷井　彪　1982　「いわゆる阿玉台Ｉａ式とその周辺の土器群について」『土曜考古』6　土曜考古学研究会

谷井　彪　1986　「阿玉台式からみた東北南部大木式の変遷」『古代』80　早稲田大学考古学会

田村　隆・原田昌幸　1986　『常磐自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』IV　千葉県文化財センター

土肥　孝　1981　「阿玉台Ｉａ式以前の土器―五領ヶ台式と阿玉台式の間―」『土曜考古』4　土曜考古学研究会

戸沢充則他　1970　『後田原遺跡』岡谷市教育委員会

ニ　西村正衛　1954　「千葉県香取郡小見川町白井雷貝塚（第二・三次調査）」『学術研究』3　早稲田大学教育学部

西村正衛　1972　「阿玉台式土器編年的研究の概要―利根川下流域を中心として―」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』18　早稲田大学大学院

西村正衛　1984　『石器時代における利根川下流域の研究―貝塚を中心として―』早稲田大学出版部

ハ　原田昌幸　1986　「報告書における遺物の「総量把握」の必要性」『東京の遺跡』10　東京考古談話会

八幡一郎・西野　元・岡崎文喜　1971　『高根木戸』船橋市教育委員会

（文化庁文化財保護部美術工芸課）